

火消しとは (火消しに初めて触れる方へ。)

江戸を火事から守れ！徐々に強化される消防組織

「江戸を火事から守れ！」

この難題に立ち向かう消防組織の第一号は1629年(寛永6)に誕生します。

名を「奉書火消し(ほうしょひけし)」。

幕府が大名十数家に火の番を命じたものなのですが、火災の時に臨時召集されるだけ。

日頃から消防訓練をしていたわけではない上、役割分担も不明確でした。

当たり前ですが第一号組織はうまく機能しなかったそうです…。

組織化でまごついている間に、1641年(寛永18)、「桶町火事」と呼ばれる大火が発生。

当時の将軍みずからが陣頭に立って消防活動の指揮をとったといわれています。

将軍の名は、徳川家光。3代目将軍です。家光の奮闘むなしく、

桶町火事では大きな被害が出てしまいました。消防組織改革の必要性を痛感した家光は

新たな組織を作ります。名を「大名火消」。家光が大名16家を指名し、

4組に編成を整え消防隊としました。消防活動の対象は主に江戸城や武家地で、火事が起きると火元に近い大名が自ら火消したちを率いて出動する、というようにルールも明確化。

しかし、これでもうまくいきません。大名とは権威と名声をなにより重んじるので、

火事の現場に向かうのに華美な装束で行進したり、偉い幕府の役人がくると

火事そっちのけで挨拶に行ったりなどしてしまいます。(現在にも居ますネこんな人。)(*;)

なかには、一体なにと張り合っているのか、火消しの最中にもかかわらず装束の着替えを行う

大名が現れたりして、「大名火消」も消防組織としてはうまく機能しませんでした。

ちなみに、大名の火消しとして有名なものに加賀藩前田家お抱えの火消し部隊。

通称「加賀鳶(とび)」がいますが、こちらは前述の「大名火消」とはまた別で、

あくまで加賀藩の自衛のための私設消防団。「加賀百万石」のプライドにかけ、

加賀鳶に選ばれたのはイケメンばかり。らしいです(今も昔しもイケメン人気は変わらないようです)

しかも、彼らは「雲にカミナリ」というカッコいいロゴ入り装束で目立ちまくっていたので、

浮世絵などにもよく描かれ江戸中が知る大人気集団になりました。現代の(EXILE)的な存在？

消防組織としてパツとしなかった大名火消と異なり、加賀鳶は見た目の華やかさに加え、

火事場での働きぶりも素晴らしかったそうです。ただ、威勢がよすぎるあまり

しょっちゅう喧嘩騒ぎを起こしていました。そして、またもや

大規模な火災が江戸を襲います。「日本史上最悪の大火」といわれた1657年(明暦3)の

「明暦の大火」です。この火事での死者は推定6万人、(現在の帯広市の人口の3分の1以上)(°Д°)

江戸の町も焼け野原と化しました。

じつは明暦の大火の7年前、幕府は新たな消防組織「定火消(じょうびけし)」をつくって、

いつか来る大火事に備えていました。定火消は旗本2家を選抜、江戸城周辺の防活動を専門とし大

火後、幕府はさらに2家を増やし、旗本4家による強化版「定火消」を組織しました。その後、

さらに強化して旗本10家からなる超強化版「定火消」(十人火消とも)を編成するなど、

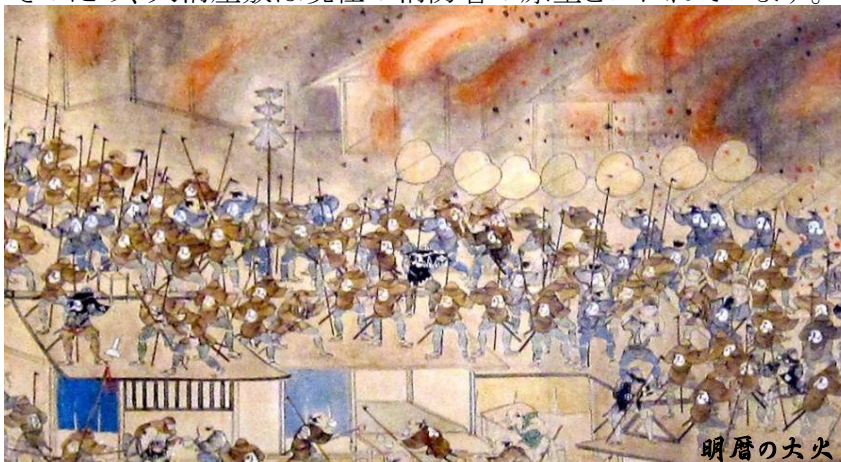
どんどんパワーアップしていきます。また、これまでの反省から、「定火消」にはいくつかの

改善がなされています。たとえば、任命された旗本は江戸城周辺に家族とともに住める

火消屋敷を与えられます。屋敷には火事を監視するための火の見櫓(ひのみやぐら)が設置され火

災を知らせる半鐘(はんしょう)や太鼓も備えられていました。

そのため、火消屋敷は現在の消防署の原型といわれています。



庶民を守るヒーロー、町火消しの登場。

庶民を守るヒーロー、町火消しの登場

時代とともに徐々に強化されていった消防組織ですが、100万都市・江戸を守るにはまだまだ不十分でした。大名火消も定火消も武家主導の消防組織。

表向きは町人地の消防も担当することになっていましたが、実際には江戸城周辺の武家地の消防活動には熱心でしたが、町人地はおざなりです。そこに大きくメスをいれ大改革をしたのがこの人。暴れん坊将軍・徳川吉宗です(*^*)v。大改革の方針は、「町人による町人のための消防組織を設置せよ！」

この難題を受け、新たな消防組織づくりを実行したのは――

“大岡越前”で知られる名奉行・大岡忠相(ただすけ)です。

大岡忠相は吉宗の命を受け、1720年(享保5)、町人地を火災から守る町人による民間消防組織「町火消」を組織しました。時代劇でおなじみ

「いろは四十八組」しじゅうはちくみの誕生です。

ちなみに、「いろは文字」のなかで「この文字はダメだ」ということで「百」「千」「万」「本」にチェンジされた文字が4つあります。それらはこちら。

へ＝屁(力が抜けちゃうから?)ら＝摩羅(まら)(つまり男性器のこと)

ひ＝火(当然、火は良くない)ん＝終わり(一卷の終わりでは困る)

江戸っ子はなにごとにも縁起を担いだんですね。

その後、本所・深川16組も加わり、総勢およそ1万人の火消し人足が消防活動の主力として江戸の火事と戦います。江戸時代中期以降の江戸の町人人口が50～56万人くらいだったと推定されているので、5人に1人は消防団員、ということになります。

めちゃくちゃ多い!(*_*;でも、それくらいの人数がいないと江戸の火災に

対応出来なかったということなのでしょう。

ちなみに、町火消しは町奉行の指揮下にあり、その構成は、町火消全体を統率する「頭取(とうどり)」を頂点に、いろは各組のリーダーである「組頭(頭)」、町火消のシンボルである「纏(まとい)」を持つ「纏」、梯子(はしご)を持つ「梯子」、そして平の火消である「平人(ひらびと)」となっていました。町火消は民間の消防組織のため、活動費用は町内で負担しました。さらに、町火消の火消人足はほとんどが鳶職を本業とし、火事の時のみ出動する兼業消防団員。なので、町火消は現在の消防団の前身ともいわれています。当然大工、左官等の火消しもおりましたが町火消の主力となったのは建築や土木の職人である鳶たちでした。

町火消の給料について。当時の消防団員は地域によって異なりますが、数万円程度の年額報酬＋出動手当て(数千円程度)が支給されるそうです。江戸時代の町火消たちは、平の火消しで月給450～800文、現代の金額で9,000～16,000円。お金だけをみれば全然割に合わない□。

しかし、江戸の町を守る町火消しは人々から尊敬を集める存在で、特に各組のリーダーである「組頭(頭)」は、与力、力士とともに「江戸の三男(さんおとこ)」ともいわれ庶民のヒーローとして大人気であり、女性にモテモテだったとか。(現在とは少々違うようです。)

平時における組頭は、町のもめごとの仲裁なども行う“顔役”であり、湯屋(銭湯)や芝居小屋にはタダで入れるなど余禄もいろいろあったそうです。

町火消の組のシンボル「纏(まとい)」戦国時代において敵味方を区別する目印として

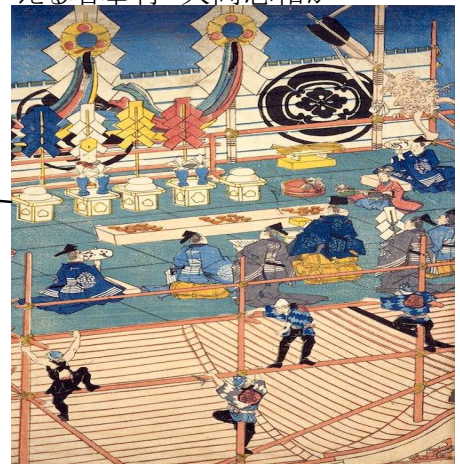
武士が掲げていた、旗印や馬印(うまじるし)です。これが江戸時代になると

火事現場で使う目印へ変化したのです。町火消の生みの親ともいえる名奉行・大岡忠相が火消たちに纏を持たせたのは、士気高揚が目的だったとか。



大工棟上
とびの様子

いろは
じゅうはちくみ
組纏



火消しVS力士。

火消しには気性の荒い者が多く、しかも、町火消は組ごとに異なる纏のもと結束していたので、自然に、ほかの組や武家の火消したちと対立し、喧嘩に発展することもあり、火事場では手柄を争って「消口(けしぐち)争い」と呼ばれる喧嘩もしょっちゅう起きたそうです。なかには火事そっちのけで喧嘩をする町火消もいたとか。

幕府が火事場での喧嘩を禁止するお触れをたびたび出したといいますが、よほどです。喧嘩相手は火消し同士とは限りませんでした。

江戸っ子憧れのヒーロー同士によるド派手な喧嘩もありました。

それは、町火消VS力士

1805年3月(文久2年2月)のある日、「め組」の鳶人足・辰五郎と長次郎、その知人である富士松が芝神明宮の境内で行われていた相撲見物にやってきました。

芝神明宮エリアは「め組」の管轄だったため、辰五郎と長次郎は役得でタダ見が許されていました。が、ただの知人である富士松はもちろん有料。

ところが辰五郎たちはタダ見させるとゴネたもんだから入り口でひと悶着。

そこに通りかかったのが力士・九竜山。

九竜山にいさめられ、辰五郎たちは一旦引き下がりましたが、その直後、

運悪く芝居小屋で辰五郎たちと九竜山がバッタリ出会ってしまい、

舞台を芝居小屋に移し第2ラウンドが開始。最終的に九竜山は部屋から力士仲間を、

辰五郎たちは半鐘まで鳴らして火消し仲間を動員し、力士VS町火消による大乱闘にまで発展しました。

このいわゆる「め組の喧嘩」は、歌舞伎や講談などに取り上げられ、

平成になっても人々に語り継がれることになりました。ちなみに、め組の辰五郎は少々輩ですが人格者で有名な鳶頭、を組の辰五郎(後の新門辰五郎)とは別人です。

※これまでの参考文献等。平成新講談新門辰五郎。とんびの独言 山口政五郎。

(旺史社)

(角川書店)

月刊鳶昭和六十年。

(社団法人日本鳶工業連合会)

月刊鳶昭和六十年。

(一社)日本鳶工業連合会)

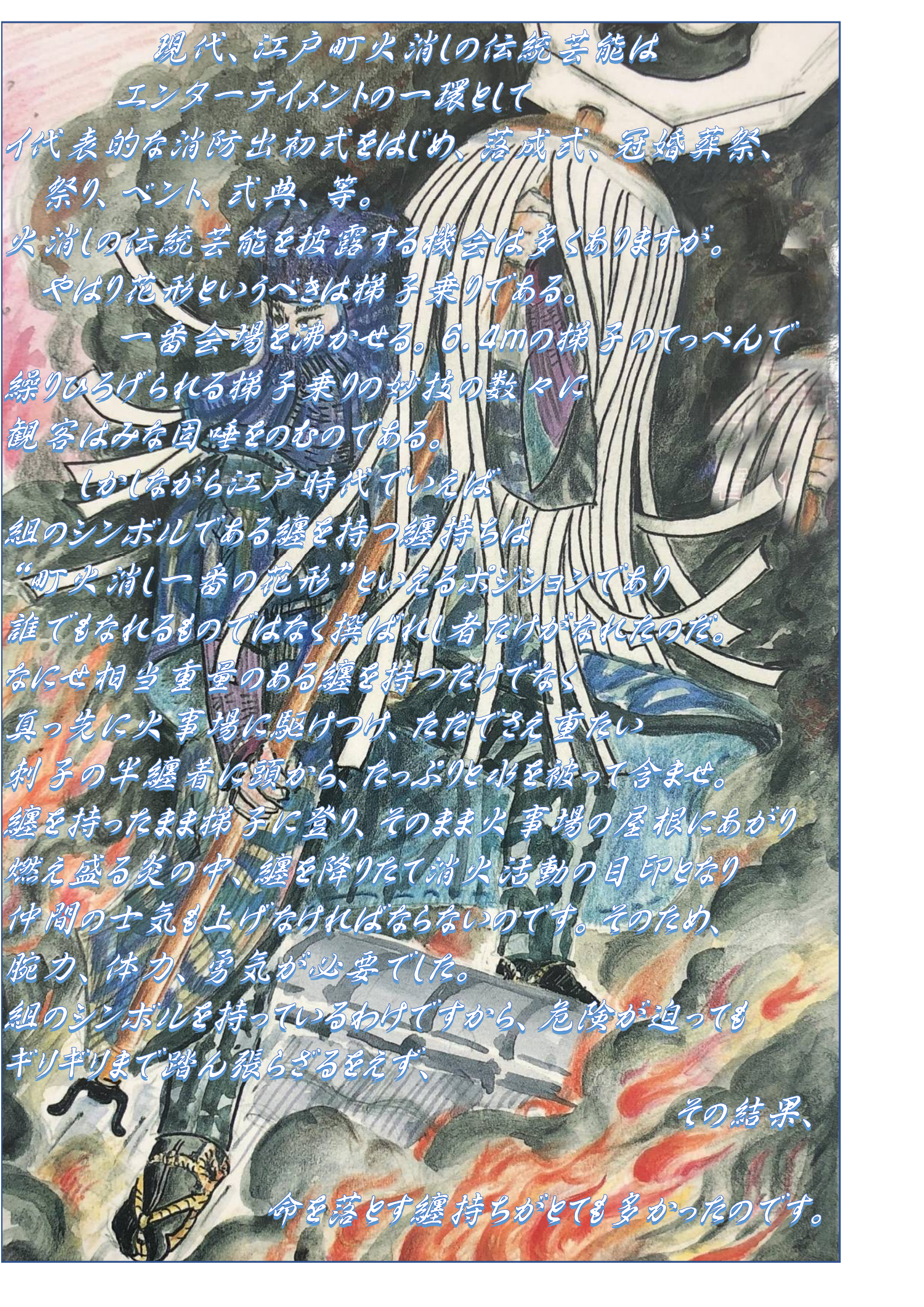
火消風俗伊達姿原色原寸浮世絵版画。

(芳賀書店)

帯広鳶職組合日鳶連入会経緯。

(一社)日本鳶工業連合会)斎藤雄次郎氏





現代、江戸町火消しの伝統芸能は
エンターテインメントの一環として
代表的な消防出初式をはじめ、落成式、冠婚葬祭、
祭り、ベント、式典、等。

火消しの伝統芸能を披露する機会は多くありますが。
やはり花形というべきは梯子乗りである。

一番会場を沸かせる。6.4mの梯子のてっぺんで
繰りひろげられる梯子乗りの妙技の数々に
観客はみな固唾をのむのである。

しかしながら江戸時代でいえば
組のシンボルである纏を持つ纏持ちは
“町火消し一番の花形”といえるポジションであり
誰でもなれるものではなく撰ばれし者だけがなれたのだ。
なにせ相当重量のある纏を持つだけでなく
真っ先に火事場に駆けつけ、ただでさえ重たい
刺子の半纏着に頭から、たつぷりと水を被って含ませ。
纏を持ったまま梯子に登り、そのまま火事場の屋根にあがり
燃え盛る炎の中、纏を降りたて消火活動の目印となり
仲間の士気も上げなければならないのです。そのため、
腕力、体力、勇気が必要でした。
組のシンボルを持っているわけですから、危険が迫っても
ギリギリまで踏ん張らざるをえず、

その結果、

命を落とす纏持ちがとて多かったです。

「半纏」と「法被」の違い。

「半纏」と「法被」の違い。

二つの違いがあやふやな暑い人も多いじゃろう？
地方に行っても観客から法被姿カッコ良いですねって
言われたり。(笑)

昔は上方の法被、江戸の半纏と言って。

(上方、) 暑い人は分からないかな？

かみがたまんざいって言ったら分かりやすいじゃろ。

ザックリ関西の事じゃな。

江戸時代、京都に天皇が住んで居たからじゃ。

で、、、そもそも名前が違うので、別物なんじゃ。

まず、法被は胸紐があり、半纏にはそれがない。

また法被は襟の折返しがある。(ブラウスみたいな。)

広袖のものもあり半纏には襟の折返しも広袖もない。

「法被」はもともと羽織を簡略化したもので、

江戸中期の逼迫した財政状況の中、大変貴重な反物の

節約という視点から登場した法被は、

羽織よりも手軽に作れる上等品ということで広まり、

お寺や大店は、出入りの職人などに家紋や

店名の入った法被を配り、

権威と絆を示すものの一つとして用いたのじゃ。

例えば、「だんじり」で画像検索すると、

みんな法被を着ている。

法被には胸紐あるので誰も帯をしていない。

じゃあ、なぜ半纏が着られるようになったのか。

その原因の一つは「天保の改革」ってのがあって。

この改革の一環で、庶民の羽織着用が禁止されたんじゃ。

羽織の簡略版である法被も同様に。そもそも法被は

高価なので武家や庄屋、僧侶とかが着用していた。

そこで庶民は、憧れの的である火消しが着用していた

「半纏」を着るようになり、これが

急速に法被の代わりとして普及していったんじゃ。

襟や背中に屋子や家紋を染め抜いた「印半纏」となり、

現在では町会名や屋子を染め抜いた半纏を

皆が祭礼で着るようになったんじゃな。

関西以北の祭りは大部分が半纏じゃろうな。...

おそらくじゃが(笑)

だから帯を締めないとならない。

どちらもちゃんとした経緯がある装束なので。

暑宴会のみんなには「法被」「半纏」の

違いを知って貰えると嬉しいんじゃが。



粹でイナセな江戸の華！ 帯広でも受け継がれる加賀鳶(かがとび)の伝統と技

「火事と喧嘩は江戸の花」といわれたように、江戸の街は
とても火事が多いことで有名でした。

勇猛果敢に火の手から江戸の町を守る『火消し』が、
江戸っ子達の憧れの的だったというのも当然のことでしょう。
その火消しの中でも特に人気があったのが、加賀前田藩お抱えの
『加賀鳶(かがとび)』でした。

加賀鳶は、江戸は本郷にあった加賀前田藩の
江戸上藩邸が召抱えた『大名火消し』でした。加賀鳶は、
自邸はもちろん、周辺の町や湯島の聖堂の火消しにも出動しました。
『絵本江戸風俗往来』によると、加賀鳶の採用基準は、
「身長六尺三寸以上」「顔色たくましく、力量すぐれし者を選びて鳶とす」とあります。
「六尺三寸」というのは「190cm」のこと。驚くことに、
男性の平均身長が150cmという江戸時代において、
現代の日本人男性でもなかなかいない「身長190cm以上」という高条件を掲げています。
加えて「顔色たくましく」「力量も優れた者」とありますから、
加賀鳶がいかに選りすぐりのハイスペック集団だということがおわかりになると思います。
またその資格好も、「五尺ほどの鳶口」を持ち、「雲に大稻妻の色刺し絆纏」の長半纏、
その上に火事装束の「鼠色の革羽織」、髪型は形の良い「加賀鳶髷」、
歩く姿は「六方振り」。

まさに、歌舞伎に出てくる弁慶のような堂々たる出で立ちで江戸の町を闊歩していました。
加えて『加賀百万石』という準御三家としての家格の高さ。加賀鳶は、
現代の私達には想像も出来ないほどの江戸の大スターでした。

『加賀鳶』の勇姿は歌川豊国や歌川国芳の浮世絵にも描かれ、
また明治期に入ってから

河竹黙阿弥によって歌舞伎の演目『盲長屋梅加賀鳶』にもなったことから、
依然衰えぬ人気の高さが伺えます。しかし火消しも加賀鳶も、
明治期に入ると幕藩体制と共に消滅してしまいました。

しかし前田家は、加賀鳶をお膝元の金沢に呼び寄せ、
藩の火消し役として配置、加賀鳶はその伝統と技を後の金沢市消防団に伝えました。
同時に全国にも普及していったようです。

大江戸の職人氣質

今ではあまり聞かれなくなった“職人”という言葉。江戸時代の代表的職人といえば、鳶(とび)、大工、左官、仕事師ですが、それ以外にも約百四十種類もの職人がいました。なかでも伝統と気概で江戸の花形だったのが、鳶(とび)、大工、左官、の三職でした。彼らは大空のもと、大江戸を築き上げていった建設者であったため、「華の三職」ともてはやされました。彼らは誇り高く、粋(いき)で威勢がいいという特性をみずからつくりあげましたが、その反面、軽率で、おっちょこちょいで鼻っ柱ばかり強いという欠点もあわせもっていたのです。そんなふうには彼らを仕立てたのは、修業時代の精神的、肉体的な苦勞でした。華の三職を例にとると、まず、十二から十三歳で親方に弟子入りし、朝は掃き掃除から飯炊きとこき使われます。早い者で一年、普通でも二年間は、こういった下働きが続くのです。その後、親方の許しを得て、弁当持ちで仕事場に出かけますが、道具の名前を教わる程度で、あいかわらず仕事の内容といえば木屑集めか雑用でした。夕方になれば、風呂焚き、飯炊きと追い回され、ちょっとでも動作が鈍いと、やれ「まぬけ」だの「うすのろ」だのと親方に怒鳴りまぐられ、へまをしようものなら往復びんたが飛んできて、容赦なく飯ぬきの罰が待っていました。現代にも似たようなスパルタ教育を売り物とする団体がありますが、現代人がこの仕打ちにどれだけ耐えられるでしょうか。その後、八年目で半人前になれるといわれ、それまではタダ働きだったものが、この頃から、祭りの時期には小遣い銭がもらえるようになり、天まで昇る心持であったと言います。それからさらに数年の修業を経て、やっと独立できるようになります。あまりの辛さに半数は消え失せると言いますが、現代人であれば、おそらく一人も残らないのではないのでしょうか。江戸の「華の三職」の誇りと気概は、この試練を乗り越えてきた“自信”にあるのです。まさに、怖いものなし。「ってやんでい、べらぼうめ！」なのです。三職の賃金は一日あたり五四〇文、普通町民の賃金が三百文ですから、すでに倍ちかいわけです。そのうえ実労働時間は四時間程度。早朝・残業(黄昏まで)ともなれば時間外手当がつき、実労十時間なら、賃金は二日分になったと言いますから、華の三職という商売はやめられなかったのです。また、江戸では頻繁に火事が起こっていましたので、食いつぱぐれもなくひっぱりだこで、笑いが止まらないほど金がふとこに入ってきました。当然遊びも派手に、また粋になりました。「江戸っ子は宵越しの銭はもたねえ」と言われる所以です。

鳶(とび)は昔のアイドル

火事と喧嘩は江戸の華、なぞと昔から言いますが、火事といえば、火消し。火消しといえば、鳶のお兄さん方で、当時はかなりモテたらしいのです。江戸の消防組織は万治年間(一六五八～一六六一)頃作られたと言われていますが、これを整備したのが、将軍吉宗の享保時代(一七一六～一七三六)で、大岡越前が町奉行に就任してからと言います。江戸の火消し組織は、幕府直轄の定火消し(じょうびけし)、大名直属の大名火消し、町奉行統括の町火消しと、大きく三つに分類できます。町火消しは、それぞれの町々によって編成された大組十番小組四十七組の消防組合でした。時代劇「暴れん坊将軍」を思い出していただきたい。たしか、め組に入り浸る徳田新之助とは……。大名火消しのなかで当時名を馳せていたのが、加賀藩お抱えの加賀鳶(かがとび)です。もっとも、加賀鳶の歴史は相当古く、天和元年(一六八一)には幕府の命令で御三家に加え、加賀鳶の出動記録が残っています。鳶が火消し役として適任であったことは、その職掌からして明らかで、当時の消防組織で先頭にたって働くのは鳶が主体でした。また、当時の鳶の服装はきわめて派手で、羽織の表(紺地)を着て火消しに当たり、火消しが終わると派手な絵模様の裏を返して、見せびらかしながら町中を練り歩きました。現代版リバーシブルコートのようなしゃれた着こなしをしていたのです。この火消し装束は当時のひとびとにもてはやされ、大店(おおだな)の若旦那が金に糸目をつけずに、浮世絵師に作らせた半纏(はんてん)なども残っています。火消しの衣装は、江戸の「粋」の象徴だったのです。大体において鳶には伊達者が多く、命をかけて纏(まとい)を振りかざし、鳶口(とびくち)を手に火事場に飛び込んでいく様子のいい男たちは、江戸の女たちの憧れの的でした。黙阿弥(もくあみ)の戯曲「盲長屋梅加賀鳶」(めくらながやうめのかかとび)の主人公、鳶梅吉の女房おすがなど、武家の娘でありながら、実家と縁を切ってまでも梅吉の女房になっています。火消しの人気の高さを物語る逸話でしょう。加賀鳶は加賀藩お抱えの鳶でしたが、江戸の花町でのモテぶりは天下一品だったそうです。さながら、現代のEXILEのようだったのでしょうか？蛇足ですが、江戸では正月のお飾り売りは、たいていの場合、鳶の組や仕事師などが、歳末にだけ小屋をかけて商いをしたのだそうです。

帯広鳶組合発足経緯

帯広鳶組合発足から今日までの経緯

大正8年(1919年)に千葉初穂氏を中心に

地元鳶職の交流のある者同士が集まり帯広鳶職組合を発足

帯広鳶職組合発足から46年後の昭和40年(1965)に

日本鳶工業連合会発足(翌年社団法人化)

発足当時に全国の鳶職に入会を促す。

翌昭和41年日鳶連の事務局斎藤氏来帯

松浦組事務所にて、松浦武氏、菊地聖二氏、神部保太郎さんらが
代表し日鳶連に入会手続きを済ませた。

事情聴取協力

帯広鳶土工事業組合長: 穴戸清氏

社団法人日本鳶工業連合会事務局: 斎藤雄次郎氏

2009/3/11野崎正博記

目 次

キヤリ

木遣り	3
一、木遣りという名称の由来	3
二、木遣り歌の形式と内容	3
三、木遣り歌の起源	3
四、木遣り歌の移り変り	3
五、江戸時代以後の木遣り	4
六、現代の木遣り	4
七、木遣りの種類とその分類	4
木遣りの「譜」	6
木遣り歌	7
一、真鶴	7
二、手古	7
三、棒車	8
四、小車ノアタマ（掛ヶ束）	10
五、小車の歌	10
六、中間 東金	12

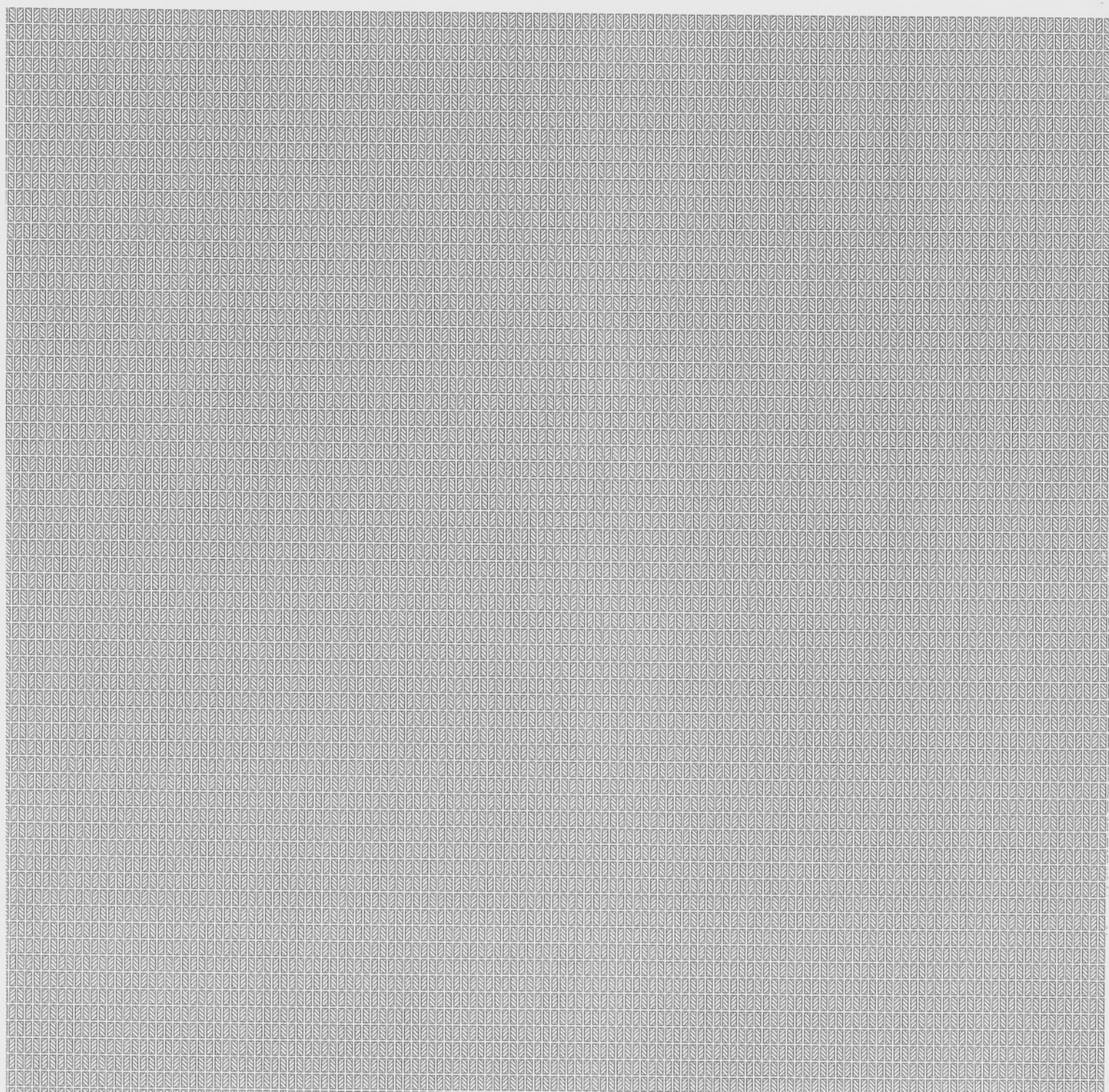
マトイ

纏振り	17
一、纏の由来	17
二、町火消の纏	17
三、基礎練習	17
四、足・腰の運び方	17
纏の振り方	18
纏の担ぎ方	19
纏の受渡し	19
真竿・蛙又、基本部分の手の動き	20

ハシゴ

梯子乗り	23
一、ハシゴ乗りの由来	23
二、出初の由来	23
三、ハシゴの作成	23
四、ハシゴの担ぎ方	25
五、ハシゴ乗りの服装	25
六、トビロのかけ方	25
七、かなびき	25
梯子の持ち方・担ぎ方	26
カギの担ぎ方	26
かなびき	27
鳶口の掛け方	27
演技の種類	28

キヤリ



木遣り

一、木遣りという名称の由来

「木遣り」とは、建築用材にする大木を運ぶとき、多勢が力を合わせて引っぱる事を言うのであり「木曳」と同義語である。また、石を引っぱるときを「石曳」、梵鐘（ぼんしょう）などを引く場合「鐘曳」といわれ、最初は、このように引っぱるものに依じてその名称も違っていたが、後には、これら建築用材を運搬するのを「木遣」という名で総称するようになった。

二、木遣り歌の形式と内容

昔は、現代のように建設機械が発達していないため、巨岩や大木など重量物を運ぶときに多くの人の力を必要とされた。

そこで、人間は一人の統括する指揮者によって全体の力を結集する方法を見い出した。その中心者の号令によって重いものを運搬したのである。

即ち、この号令の役目であったのが木遣り歌であるといわれている。

まず指揮者が今でいう「呼び声」で全員の士気を高め、他の引っぱる人達がそれを受けて一勢に力を結集するもので、このような力仕事と密着した日本人独特の労働歌であった。

この指揮者の「呼び声」を「音頭」といい、引っぱる曳子の合唱を「受」といってお互いが声を掛け合いながら行う「掛け合い」の形式をとっているのが木遣音頭とも言われている。

三、木遣り歌の起源

「近代世事談」という書物に、京に住む禅僧栄西が、隣の中国（当時の宋）へ留学したときに、寺院の建設を見聞した折、作業をするときに

多くの入夫が一人の発声で音頭をとりながら労働する様を見て、帰国後の一二二二年（建仁二年）京都「建仁寺」新築に応用したのが初めだとある。

しかし、それ以前の古代から、人間は自分をまとめるための「住」を共同で作る風習があったと考えられ、その頃から、このような一種の木遣り歌が存在したと言われている。

ただし、それが一層盛んになって当時の人々の耳に入り、記録にも現われるようになったのは、戦国時代以後、人間が権力を持ちはじめた頃に、諸国で大きな城や神社・仏閣が造営されるようになってからと推定される。

〈参考〉中国の文献

「呂氏春秋出翟煎对魏惠王曰举大木者前唱興樗後亦応之比举重動力之歌也、今人举重出者一人唱則為号頭衆皆和之打号曰比其始也」（和漢三才図絵・拔萃）

※興樗……木遣 号頭……音頭 打号……側うけ

四、木遣り歌の移り変り

初めは、純粹に重く大きい岩石、大木を運ぶときに音頭をとるための手段として歌われたようである。

しかし、大きな城や神社・仏閣など大きな建物が造営されるようになってからは建築そのものが慶事的なものと一般にも考えられるようになったため木遣歌もめでたい唄として仕事を離れて歌われるようになった。

江戸時代に入ってから、三味線唄ともなり、特に同時代の元禄期に入ってから、一七〇三年（元禄一六）刊の「松の葉」（左山検校者）記載の長唄きやりは一般庶民の歌い物となり現在でも、貴重文化財とし

木遣り

て残っている。

また、その頃から火消、鳶の類が土木関係の職にあったことから、木遣り歌は、彼らの本芸となり氏神祭礼のときに鉾・山車などを曳きながら、木遣歌を歌うことが大きな目的になり喜びになっていた。

現代では、その木遣り歌がはやりもの節となり「清元」「常磐津」「富本節」や「歌舞伎」など大衆に広まっており、鳶職に伝わる木遣りは、棟木だけを巻き上げる上棟式や橋の渡り初、記念碑の除幕式などの慶事のほか葬儀にも歌われるようになっていた。

五、江戸時代以後の木遣り

現代に継承されている木遣りは「三味線歌曲」並びに「歌舞伎踊」と、鳶木遣りに分かれるようであるが江戸の木遣りを記したものとして、浅草の「浅草寺」の戦勝記念塔の碑文に（日清か日露か不明、現在は火災にあってない）「慶長十一年丙午武蔵国江戸城を創築し、経営せらるるや庶民・醫集・永久萬歳を頌せざるなし、喜六・弥六兩人なるものあり、歌を作て述べ、衆口相和す、陣扇及び筋を褒賜せらる、是を木遣り音頭の努めなす、其の後諸侯伯、築城及び大厦を終始する事ある毎に皆此の曲調を用ざるなし記念燈台を設くるに了り其の原曲を記す」とある。

※大厦……大きな建物

このように各地に伝承されている木遣りは先に記録されていることから江戸の木遣りが伝えられたものとも考えられ、現在伝わっている木遣り（「軽井沢」「松阪」「五万石」「伊豆」など）からも、その事が認識できようである。

六、現代の木遣り

現在、歌われている木遣りの調子は、江戸の大間に対し、地方の中間に大別されると考えられる。それは、現代に近い時代（年代は不明）に基礎固めの作業が行われたところの江戸に代表される「棚作業」と横浜に代表される「やぐら作業」によって分けられたと考えられる。

七、木遣りの種類とその分類

（主に昭和四十五年東京都教育委員会発行の文献から）

①真 鶴

いかなる場所、いかなる木遣りにも必ず最初に歌われる。

「鶴の一声」ということから、仕事を始めるときの合図。

②地

木遣の基本で警固・手古舞・露払などすべて清めを意味するもので、それ故にあたまに「エイホー」と捨て声を入れる。

（手古・さらば・棒ぐるわ・小車・のぞき・ちよちよけ節（これは端物にも歌われる））

③くさりもの

くさはり、くさき、くさきなど、仕事の一区切りを意味するたばこ休みのときなど仕事のキリに歌われる。

田歌・変り田歌（端物或は大間に歌われるが便宜上ここに収む）

金輪・酒田（大間にも歌われる）絵師（同上）年代記（同上）日光（同上）

黒金・山椒の木（大間にも）

④端物

くさりとくさりの間に用いる。

民謡めいた儀式ばらないもの。

木遣り

(軽井沢・道念節・越後・松阪・東金(大間にも) 五尺手拭)

(五万石・鹿島・伊豆・どんしよめ(大間にも)・鎌倉・量り目など)

⑤ 大間

くさり又は間のくさに用いる。

節もよく木遣りの代表的なもの

(てっしよめ・二番てっしよめ(端的に用いられるが便宜上ここに収む)など)

⑥ 追掛物

御祝儀もので、木遣二、三人で一人一句づつ追い掛けて歌うもの、俗に節物ともいう。

謡曲の一種。

(追いかけの唄・寒山・とねり追掛・小松式の歌・桜揃・太田道灌
一の谷・新松風・都廻り・祝詞など)

⑦ 手休め物

地形の終りに、また側受けの鳶頭が大変疲れたと見たときに歌う。

(天神七代・駒くらべ)

⑧ 巻物

木曳き・石曳き、或は棟上げ等、すべての巻き物に用いる。

(巻き物は巻き上げて運ぶもの)

(巻城内・大木遣)

⑨ 流し物

道中の長い時に歌う。

(駅路 東海道・同仲仙道・奈須野甚句・海老屋甚句)

これらの木遣をうたうには、音頭を出す木遣師と受声をする側とがい

る。

木遣師はまた、兄木遣「アニ」と弟木遣「オト」とに分け、交互に歌を出すようにしている。

胴搦の場合、一分間に棒二つを落すのを中間という。

大間はそれよりも間隔がのびているもの。

木遣に祭囃子をかぶせることがあるが、その折は鎌倉を奏しそれで通す。歌がすんで、打込み、屋台(二くさりぐらい)をつけることもある。

木遣りの「譜」

三拍子	綱	三拍子	中棒	三拍子	シッ立	三拍子	本棒
間拍子をとる	左手で綱を	利腕で綱を握る	真棒を上げ シヨリを入れて落す				

右図は、ここに掲げる「中間」の譜、本棒から出て、本棒に落るまでの一区切りを示すものである。

「中間」は、この一区切りを、三十秒でやるのが標準とされるが、多少は延びる。

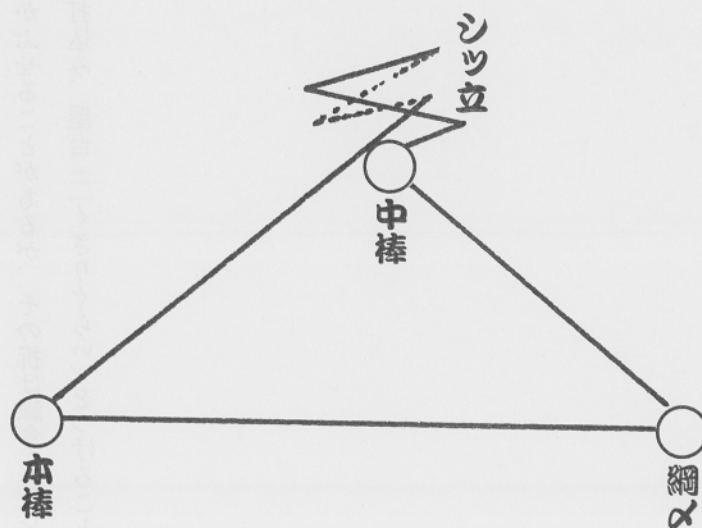
また、棒を突かない出役木遣等は、反対に時間的に若干、つまり加減になる傾向である。

下図は、本譜の「棒運び」で、棒は「うろこ」形に突く、左膝前に在る時が本棒、右膝前に移った時が綱、中央に来たときが中棒である。

中棒までは、余り棒の元の部分は動かさないで、握った手の方で拍子をとる。

中棒から、シッ立の間は、先づ静かに手前に引倒し、次は、ゆるやかに元に戻す。これを今度は静かに前に押倒すようにする。

次は、力を入れて手前に引起す。これが、シッ立で起した棒を、向う前に小刻みに動かす。この動作が真棒をしおっている所に該当する。そして左膝前の本棒の位置に引きつける。



木遣り歌

○印ハ息ヲツクトコロ
◎印ハ落チ棒

一、真 鶴

兄キヤリ

オーオーオーイヤーレヨ。

側 エーエーエーヨーオーエー。

二、手 古

(本棒より) (上棟祭、お祭手古舞、地業)

兄キヤリ

オ¹ーイヤーア²ーレテ²ー

側 テ²ーコ²ーセ²ーエ²ーエイエ²ーホ²ーオ²ーイ²ーヤ²ー◎

兄キヤリ

エーエ²ーゴ²ヨ²ーワ²ーア²メ²ーデ²タ²ーノ²。

側 コ²ーレ²ーワ²セ²ーエ²エ²ーエイエ²ーホ²ーイ²ヤ²ー◎

兄キヤリ

エーエ²ーワ²カ²ーマ²ツ²サ²ーマ²ーヨ²オ²。

側 コ²ーレ²ーワ²セ²ーエ²エ²ーエイエ²ーホ²ーイ²ヤ²ー◎

兄キヤリ

エーエ²ーエ²ダ²ーモ²ーオ²サ²ーカ²ーエ²ーテ²エ²。

兄キヤリ

側 コ²ーレ²ーワ²セ²ーエ²エ²ーエイエ²ーホ²ーイ²ヤ²ー◎

エーエ²ーコ²チャ²ーハ²ーモ²オ²シ²ーゲ²ル²ウ²。

側 コ²ーレ²ーワ²セ²ーエ²エ²ーエイエ²ーホ²ーイ²ヤ²ー◎

兄キヤリ

手古²ーデ²ーハ²ヤ²ーセ²ー。

側 コ²ーレ²ーワ²セ²ー。以下略ス

兄キヤリ

ゴ²ク²ロ²ーナ²ガ²ーラ²ー。

側 コ²ーレ²ーワ²セ²ー。以下略ス

兄キヤリ

ヤ²ーレ²ーコ²レ²ワ²ー。

側 コ²ーレ²ーワ²セ²ー。以下略ス

兄キヤリ

中²ノ²ーツ²ーナ²ー。

側 コ²ーレ²ーワ²セ²ー。以下略ス

兄キヤリ

ソ²ロ²ーエ²ーテ²ー。

側 コ²ーレ²ーワ²セ²ー。以下略ス

木遣り歌

○印ハ息ヲツクトコロ
◎印ハ落チ棒

兄キヤリ

モ—シト—ツ—。

側 コー²レワ—セ—。 以下略ス

兄キヤリ

千代ニ—八千代ニ—。

側 コー²レワ—セ—。 以下略ス

兄キヤリ

シメワヨ—イゾ—。

側 コー²レワ—セ—。 以下略ス

兄キヤリ

目出—タ—ク—。

側 コー²レワ—セ—。 以下略ス

出役流しキヤリの場合は（エ—ホ—）入れる

三、棒 車（上棟祭、手古舞、地業）

兄キヤリ

エ—サラバ—ヤ—ル—。

側 ウ—ワ—エエンヤ—ハラ—ヨ—オ—◎ヨ—イ—

サ—セ—²。エ—エ—エ—³。エ—イ—ヤ—ネ—。

弟キヤリ

エ—エ—。

側 ヤレ—コリヤ—¹。

弟キヤリ

ナ—カ—ノ—ツ—²。

側 ナ—カ—ラ—エエンヤ—ハラ—ヨ—オ—◎ヨ—

イ—サ—セ—²。エ—エ—エ—³。エ—イ—ヤ—ネ—。

兄キヤリ

エ—エ—。

側 ヤレ—コリヤ—¹。

兄キヤリ

御代—ハ—目—²。

側 出—タ—ノ—エエンヤ—ハラ—ヨ—オ—◎。 以下

略ス

弟キヤリ

エ—エ—。

側 ヤレ—コリヤ—¹。

弟キヤリ

峰—ノ—小—²。

木遣り歌

○印ハ息ヲツクトコロ
◎印ハ落チ棒

側 マーツ—ニ—エエンヤ—ハラ—ヨ—オ—◎¹ 以下

略ス

兄キヤリ

エ—エ—。

側 ヤレ—コリヤ—◎¹。

兄キヤリ

只ニ—ギ—ヤ²—。

側 ア—カ—ニ—エエンヤ—ハラ—ヨ—オ—◎¹ 以下

略ス

弟キヤリ

エ—エ—。

側 ヤレ—コリヤ—◎¹。

弟キヤリ

コ—エ—ヲ—カ²—。

側 ア—ケ—ロ—エエンヤ—ハラ—ヨ—オ—◎¹ 以下

略ス

兄キヤリ

エ—エ—。

側 ヤレ—コリヤ—◎¹。

兄キヤリ

ゴク—ローナ²—。

側 ガ—ラ—モ—エエンヤ—ハラ—ヨ—オ—◎¹ 以下

略ス

弟キヤリ

エ—エ—。

側 ヤレ—コリヤ—◎¹。

弟キヤリ

千代—ニ—ヤ—。

側 チ—ヨ—ニ—エエンヤ—ハラ—ヨ—オ—◎¹ 以下

略ス

兄キヤリ

エ—エ—。

側 ヤレ—コリヤ—◎¹。

兄キヤリ

モ—シト—ツ—タ²—。

側 ノミマ—ス—エエンヤ—ハラ—ヨ—オ—◎¹ 以下

略ス

木遣り歌

○印ハ息ヲツクトコロ
◎印ハ落チ棒

弟キヤリ

エーエー。

側 ヤレ—コリヤ—◎¹

弟キヤリ

目出 タ—ク—オ²。

側 サ—メ—テ—エエンヤ—ラ—ヨ—オ—◎¹ヨ—イ

—サ—セ—エ—エ—エ³—エ—イ—ヤ—ネ—。

四、山車のマタマ

(掛け束) 向フヨリ(三分) (上棟祭送)
棒数七本

弟キヤリ

オイ—ヤ—ル—ヨ◎。

側 ハ—ソ—リヤ—ヤレ—コ—リヤ—ネ³。

兄キヤリ

サ—シイラ—ベ—

側 エ—エ—◎¹シメロ—ヤ—レ—エ—エ—ンヤ

—ラ—ヨ—◎¹オ—オ—イ—セ²—ソ—リヤ—ヨ

—イ—サ—ヤ—レコレワ—◎¹ヤレコレワ—ソ—

レワ—エ—エ—エ—ヨイサヤレコリネ◎¹シメロ—²

カ—ケエロ—エ—エ—ヤ—レ—◎¹オ—オイセ²

—エンヤ—レ—ヨ—イ—サ—ヤレコレワ—◎¹

ヤレコレワ—ソ—ジャ—エ—エ—エ—ヤ—ラ—

ワ—◎¹

五、山車の歌

本棒ヨリ
棒数二十一本(拾分) (お祭手古舞、地業)

兄キヤリ¹

御代²—オ—ワ—。

側 ヤ—レコレワイ◎¹。

兄キヤリ

ヤレ目—出²。

側 エ—エ—目出—タ—ノ—ヤレコレワ—◎¹—コレハ

ワ—カ—²—オ—マ—ツ—ウ—◎¹エエサマ—²ヨ

—オ—オ—オイナ—³エンヤ—レコレヤ—◎¹—ソ

—ジャ—ソ—ジャ—ヨ—ネ³。

兄キヤリ

ヤレ—エ—エ—エ—ダ—

側 エ—エ—エ—◎¹ツコイコレワ—ヤ—レコ—レワイ

ネ—³

木遣り歌

○印ハ息ヲツクトコロ
◎印ハ落チ棒

兄キヤリ

ヤレサーカ。

側

エーエー◎サカエーテヤレコレワコレワ
葉モ◎オオイシゲエールヤ
レコレワシメロカケエロ
エーエーヤレヨオオイセエンヤ
レゾンレワヤアラワセ
エーエーエーエーエーヤレ◎エエヤ
アラヨイサヨイサヤレコレワ
◎ヤレコレワソレエハエーエーヨイ
サヤレコリヤネ◎返しサリトテワヤレコ
レワメロカケエエロエーエ
ヤレ◎ヨオオイセエンヤレヨ
イサヤレコレワヤレコレワソ
ジヤエーエーエーエー◎返しモツ
モヤレコレワシメロカケエエロ
エーエーヤレ◎ヨオオイセエンヤ
レヨイサヤレコレワヤレコレワ
ソジヤエーエーエーヤラワイ◎

弟キヤリ

ミネノイーエー

側

ヤレコレワイ◎

弟キヤリ

ヤレ小マ

エーエ小松ニヤレコレワコレワシ
ナオツルウ◎エ掛ケテオ
オイナエンヤレコリヤ◎ソジヤソ
ジヤヨネ

弟キヤリ

オタニ

側

ヤレ◎ツコイコレワアヤレコレワイネ

弟キヤリ

ヤレナガエエ

側

エーエ◎ナガレデヤレコレワコレハカ
メ◎オイアソオブヤレコレレ
ワシメロカケエエロエーエヤ
レ◎ヨオオイセエンヤレゾン

本棒ヨリ
棒数十三本

木遣り歌

○印ハ息ヲツクトコロ
◎印ハ落チ棒

歌詞

レーワ[○]ーヤ[○]ーラ[○]ーワン[○]◎セ[○]ーエ[○]エ[○]エ[○]エ[○]
ーエイエ[○]ーヤ[○]ーレ[○]◎エエヤ[○]アラ[○]ヨ[○]ーイ[○]
サ[○]ヨ[○]ーイ[○]ーサ[○]ーヤ[○]ーレコレワ[○]◎ヤレコレワ[○]
ソ[○]ーンレワ[○]ーエ[○]エ[○]エ[○]ヨイサヤレコレヤ[○]◎
兄キヤリ(御代は目出度の若松様よ 枝も栄へて葉も茂る
弟キヤリ(峰の小松にひな鶴かけて 谷の流れで亀遊ぶ

お、中間 東 金

本棒ヨリ向フデ終ル棒数 兄キヤリ十一本
棒数 弟キヤリ十二本(歌一ツ五分)

(地業、其の他のお祝)

兄キヤリ

東¹ガ²ネ[○]ノ[○]ナ[○]ア[○]アイエ[○]

側 ア[○]ソ[○]ーリヤ[○]◎ナ[○]ンデモ[○]セ[○]

キヤリ

ソレ[○]ワ[○]茂エ[○]モ[○]オンガ[○]◎オ[○]セ[○]

側 ド[○]デ[○]ナ[○]ア[○]エ[○]エ[○]ナ[○]ンデモ[○]セ[○]

ソレ[○]ワ[○]モエ[○]モ[○]オンガ[○]◎ア[○]セ[○]

ド[○]デ[○]セ[○]ド[○]デ[○]鵜ガ[○]鳴[○]ク[○]◎ナ[○]

ア[○]アイエ[○]イ[○]エ[○]ホ[○]イ[○]エ[○]

兄キヤリ

イ[○]ーイ[○]ーイ[○]ーヤ[○]

側 ア[○]ーヤ[○]レ[○]コリヤ[○]◎[○]

キヤリ

背戸[○]デ[○]鵜ガ[○]鳴[○]ク[○]ナ[○]ア[○]アイエ[○]

側 ソ[○]ーリヤ[○]◎ナ[○]ンデモ[○]セ[○]

キヤリ

ソレ[○]ワ[○]茂エ[○]モ[○]オンガ[○]◎オ[○]イツ[○]

側 マ[○]ノ[○]ナ[○]ア[○]エ[○]エ[○]ナ[○]ソリヤ[○]ンデ[○]

モ[○]セ[○]ソレ[○]ワ[○]茂エ[○]モ[○]オンガ[○]

◎オ[○]イツ[○]マ[○]ノ[○]コ[○]ヨ[○]メ[○]コイ[○]イ[○]

シ[○]ト[○]◎ナ[○]ア[○]アイエ[○]エイエ[○]ホ[○]イ[○]エ[○]

弟キヤリ

イ[○]ーイ[○]ーイ[○]ーヤ[○]

側 ア[○]ーヤ[○]レ[○]コリヤ[○]◎[○]

キヤリ

浅[○]ク[○]サ[○]ノ[○]ナ[○]ア[○]アイエ[○]

側 ア[○]ソ[○]ーリヤ[○]◎ナ[○]ンデモ[○]セ[○]

木遣り歌

○印ハ息ヲツクトコロ
◎印ハ落チ棒

キヤリ

ソレ—ワ—³出—茶—³屋—ノ—¹ム—。

側 ス—²メ—³ナ—ア—エ—^{上ル}エ—ソ—オリヤ—¹ンデ

—モ—²セ—³ソレ—ワ—³出—茶—³屋—ノ—¹ム—。

イム—ス—²メ—³ハ—ナ—カ—モ—¹ジ—カ—¹。

ナ—ア—アイエ—²イエ—³ホ—イエ—。

弟キヤリ

イ—イ—イ—ヤ—。

側 ア—ヤレ—コリヤ—¹ネ—。

キヤリ

花—カ—²モ—³ミ—³ジ—カ—³ナ—ア—アイエ—。

側 ソ—リヤ—¹ナ—¹ンデモ—²セ—。

キヤリ

ソレ—ワ—³ヒ—ト—エ—ダ—¹ア—¹ホ—。

側 シ—²ヤ—³ナ—ア—エ—^{上ル}エ—¹ソオオリヤナ—ンデ

—モ—²セ—³ソレ—ワ—³ヒ—ト—エ—¹ダ—¹オ—イ

—ホ—²シ—³ヤ—³ヤ—³ド—³ノ—¹ミヤ—¹ゲ—¹ニ—¹。

ナ—ア—アイエ—²イエ—³ホ—イエ—。

兄キヤリ

イ—イ—イ—ヤ—。

側 ア—ヤレ—コリヤ—¹ネ—。

キヤリ

六十。六部—ガ—³ナ—ア—アイエ—。

東金ノ茂エ門ガ背戸デ鶉ガ鳴ク

背戸デ鶉ガ鳴ク 茂エ門ガ妻ノ小嫁恋シト

浅草ノ出茶屋ノ娘 花カ紅葉カ

花カ紅葉カ 一ト枝ホシヤ宿ノ土産ニ

六十六部ガ三笠ニ負ケテ 笈モ錫杖モ

笈モ錫杖モ 水晶ノ珠数モカタニ取ラレテ

アレヲ見サイナ筑波ノ山ノ山ノ横雲

山ノ横雲 下コソ我レノ親里

東金ノ田安ノ女子 菅ヲ刈リマス

菅ヲ刈リマス 殿御ニ召サス手織リ菅笠

十七ガ紅カネツケタ夢ヲ見マシタ

イ
ブ
イ

纏振り

一、纏の由来

戦乱の打ち続く時代に戦場におも向いた武将が、敵と区別をするために馬印をしたのが始まりと伝えられている。後の江戸時代になってからは、江戸に詰めていた諸大名の屋敷などで消火活動のシンボルとして纏に定紋を刷り込み、江戸中期には、大岡越前守忠相らによって八百八町の防火体制確立のため町火消が創設され、思い思いの頭飾りに工夫をこらして、他の番組と判別していた。

二、町火消の纏

消火活動における各番組の纏は、町火消の階級（六段階あった）で頭取・組頭について纏持ちが位置しており、番組の象徴として大切に扱われ、かつ、火事場へ先陣を切っていた。

〔江戸時代の火消形態〕

幕府直属の「定火消」、大名所轄の「大名火消」、民営自治の「町火消」に分けられ、町火消は、一番から十番（四番・七番は江戸の語感が類似する為除く）の八組をいろは48に分けて、防火体制をとっていた。

三、基礎練習

纏を振る以前に、基礎体力が特に要求され、腰・足・腕の筋力の鍛錬に心掛け、柔軟な体が必要である。

四、足・腰の運び方

振る場合、注意しなければならないのは「振る」のであって、「振られ」ではないことが、まず鉄則である。大名行列の「奴子振り」と違って、番組の心意気を全身に感じて、馬れんが舞うように振り切る事が大

事である。

振り方は、前のめりになる事は適当でなく体の重心が常に一定になる事が必要で一般にかえる股で振るのが正しいといわれる。

縄の振り方

①

縄を振り出す前の姿勢
②マトイの頭の向きに注意



④

振出し



⑦

右足を引き付けながら蛙又を内側に半回転して、右手の真竿をこきつつ右手下にさげ左手の蛙又は右脇下の所迄持ち上げ進行方向正面に体を向ける。
③蛙又を持つ手首は一層内に曲げる事。



②

両ひざを折り蛙又を手でつかんだ姿勢



⑤

蛙又を左手でつかみ右手で真竿の千段巻の下つかみ、左足をけり上げ一步前進する所の姿勢



⑧

蛙又の左手を外側に（回転が変わる）半回転しつつ真竿を下に下げる。真竿は体の正面に。



③

引立て



⑥

左足が地面に着き、蛙又は内側に半回転しながら廻し上げる。



⑨

左足を一步前に出しながら左手の蛙又を外側に半回転しながら左手を下方に真直ぐのばし、右手は真竿の千段巻の所を持ち、縄を右前方に倒す。
振出に戻る。



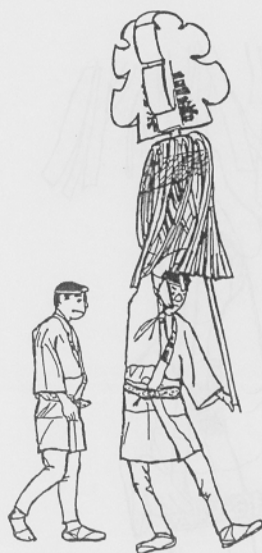
縄の受渡し



- ③ 受取る者は、受取りながら右足に重心を移しながら、受取った合図をする。引渡す者は相手が完全に受取った事を確認して手をはなす。
(双方共に素速く行なう)



- ① 交代要員は、振り手の左後方の位置を進み、頃合いを見て斜め前方に進み、合図を待つ。



- ④ 受取ったら、振りながら右足を軸に廻り、前進する。



- ② 渡す者は、蛙又の上端を持ち、受取る者が、蛙又を持ちよいようにし、受取る者は、左手で蛙又を持ち、右手は渡す者の右手の上を持つ。



真竿・蛙又、基本部分の手の動き

①



③



⑤



②



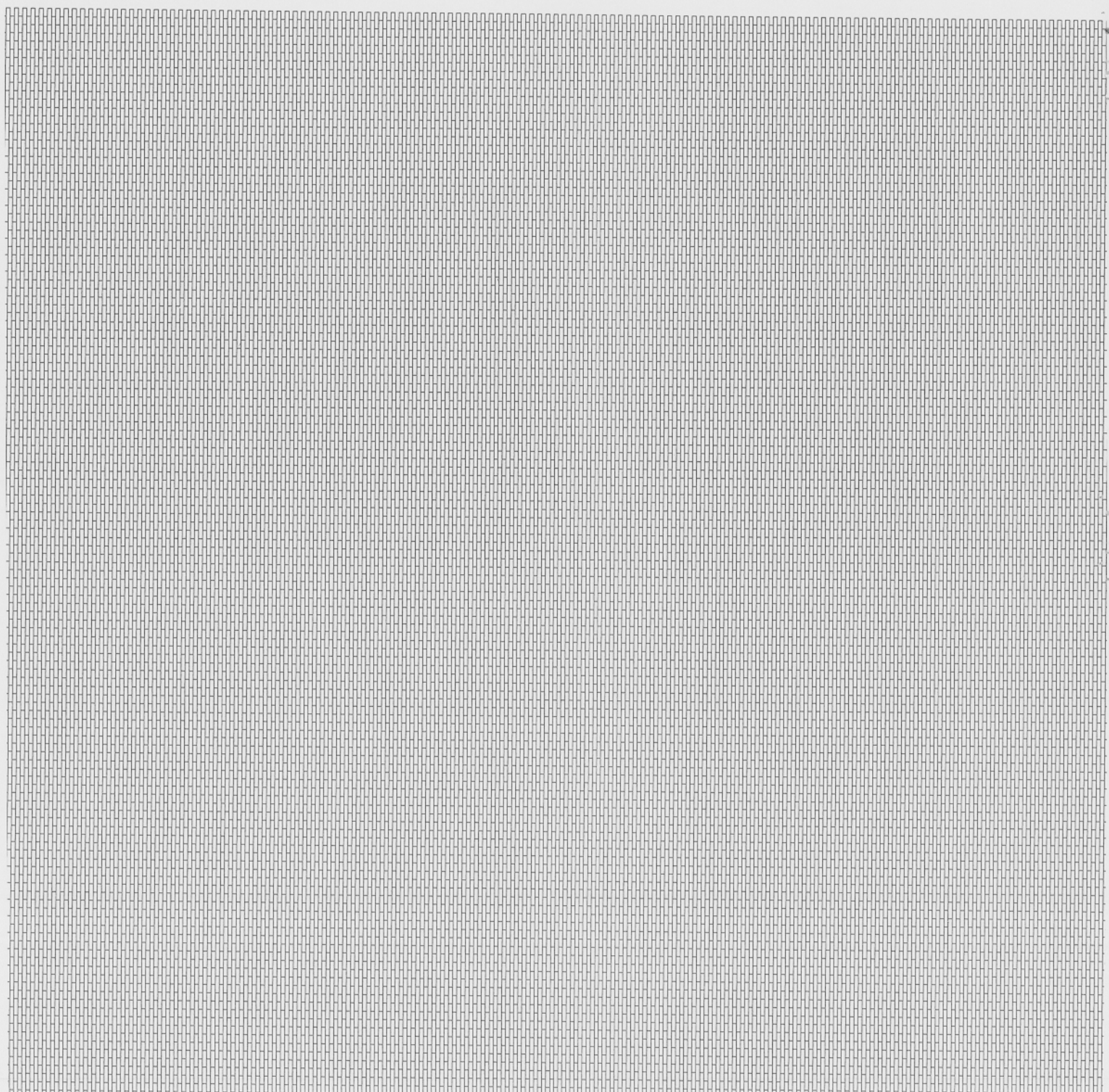
④



⑥



ハシゴ



梯子乗り

一、ハシゴ乗りの由来

本来は、仕事をするための準備運動としてとび職がハシゴに乗った。ハシゴ乗りを初めて実施したのは、江戸に住んでいた「加賀鳶」である。

加賀鳶は、前田藩に所属し、本郷の加賀屋敷（現在の東大）につかえ、屋敷内の火消しを兼ねた役職に従事し、参勤交代のときはおともをした。当時、出火の知らせを聞いた加賀鳶は、上野池の端附近の現場までやって来たが、火の手が見えないので持ってきたハシゴを立てて火の見やぐらの代用をし、ハシゴの上まで登って火事の確認に務めた。

しかし、火の手が見えないので「出火はあやまりであります」と報告したら、「もう一度確かめろ」と云われ、ハシゴの灰吹きのところまで登り足を竹に支えて右手を目の位置におき、あたかも高見の見物でもしているような格好をした。（これが後の「遠見」と云う芸に変化した）

二、出初の由来

〈万治二年一月四日（一六五九年）〉

上野東照宮前にて行なわれたのが初めだが、これは町火消しではなかったようである。

その後ハシゴ乗りや刺又乗り等を催物としてやるようになったが、平素高所で仕事をする身軽さをいかし、鳶の者が火事場で働らくときの技を競うもので、現今でも纏の振込みや木遣りと共に消防庁出初式・浅草観音堂境内消防殉職碑慰霊祭や内外人に日本の風俗行事紹介に貢献している。

〈明治八年一月四日（一八七九年）〉

町火消しとして初めて消防組出初式を行なった。

以下当時の風景をご紹介しますと、

明治八年一月四日午前八時、各望火楼（火の見やぐら）において発出信号を伝える。消防組はこれを聞き、警視庁出張所に集合し、小警視以下主任官員これをひきいて警視庁練兵所に至り、指定の地に整列する。大警視以下主任官員そのことごとく至るを待ち臨場する。

第一大区一番組より順次この技を行なう。

技の妙味冴え一同より大拍手される。

大警視出張所官員、小警視を呼び酒肴、目録を授く。小警視拝受し、これを鳶頭に伝達する。

各大区鳶頭順次大警視の前へ進み拝謝する。

事あがり大警視以下席を離れる。

これに於て酒肴を分布する。

そもそも出初式は、明治維新以前よりこれを行なう。しかれども各組毎に其町内にとどまり、いまだ此の盛典あらず。

後もつて例となす。

三、ハシゴの作成

〈材 質〉

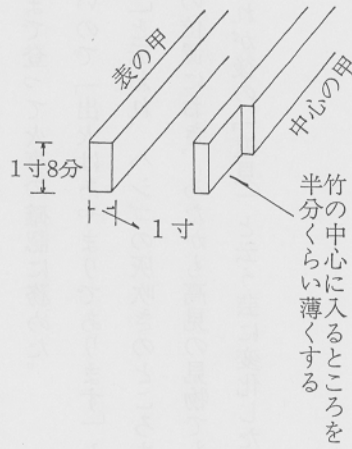
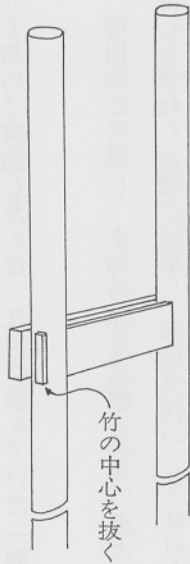
竹・真竹を使用し、根と先の太さがなるべく差の少ないのを使用する。

甲（こお）……桧材で節（ふし）のないものを使用しクギにて竹を固定する。

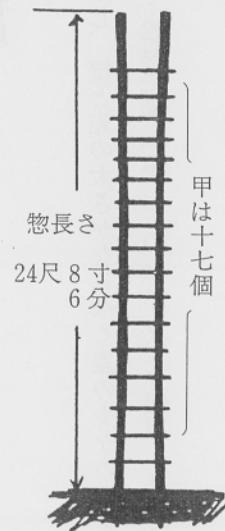
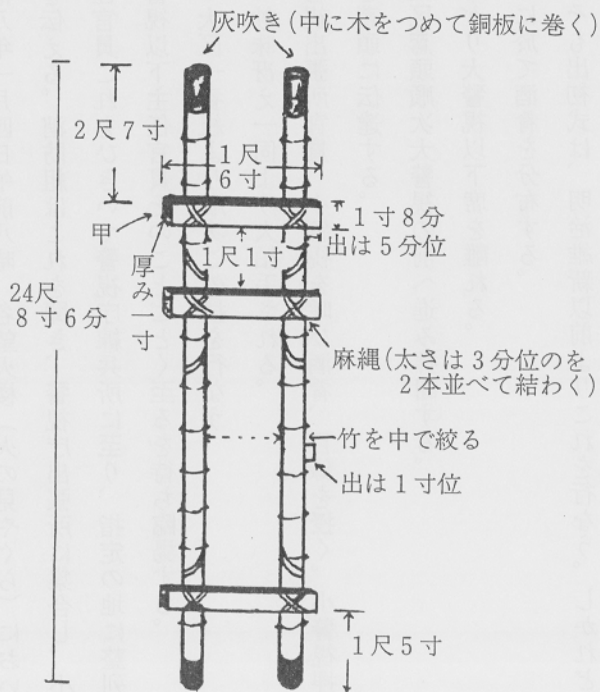
灰吹（はいふき）……竹の天辺及び根元に丸い木をつめて外部を薄い銅板で巻く。

麻縄（あさなわ）……甲と竹の部分を固定させるために使用し、二本並べて掛ける。

梯子乗り



構造	
ハシゴの長さ	二十四尺八寸六分
甲の長さ	一尺六寸
甲の厚み	一寸
甲の高さ	一寸八分
甲と甲の間	一尺一寸
灰吹と甲の間	二尺七寸
ハシゴ下端と下の甲との間	一尺五寸
甲	十七個



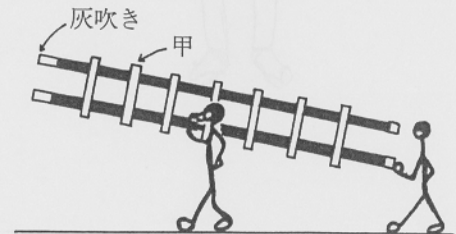
梯子乗り

四、ハシゴの担ぎ方

一人で担ぐ事を原則とし、ハシゴの中心よりやや前方の部分を担ぎ灰吹きが上がるようにする。

甲の表の部分が、顔の側面に固定する様にすればハシゴの安定が保てる。

もう一人が補助として後方につきカイシャクをする。(ハシゴのカジを取るための補助)
ハシゴのバランスをとるために、根元の内部に砂等をつめて持運びにそなえる。



五、ハシゴ乗りの服装

ハチマキ……マトイの手拭・豆しぼりの手拭等を使用し、なるべく揃いのものがよい。

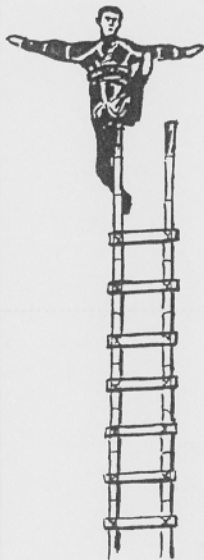
モモヒキ・ハラガケ

ハンテン……一枚バンテンを着用する。カサネバンテンは着用しない。

オビ……ひらぐけでなく木綿の二重まわり又は三尺および一重まわりの帯を胸部近くに締める。

タビ……出来るだけ着用する。

ワラジ……乗るときは脱いでもよい。

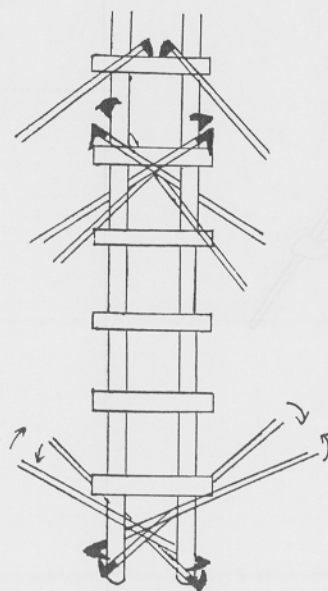


六、トビロのかけ方

人数 十六名

右図のかけ方を基礎として十分に固定し、上の部分と補足に他四挺を掛ける。

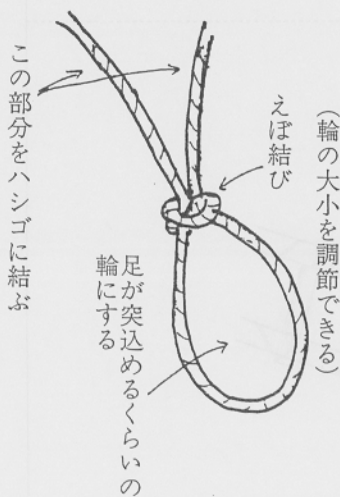
なおそれより上部前後二挺ずつ鳶口を引掛けてひき合うようにする。



七、かなびき

日本麻を三センチ位に柔かく縄い、晒し木綿でホウタイの様に巻き、足の入る位の所で「えぼ結び」をして残りの部分をハシゴに結び固定する。

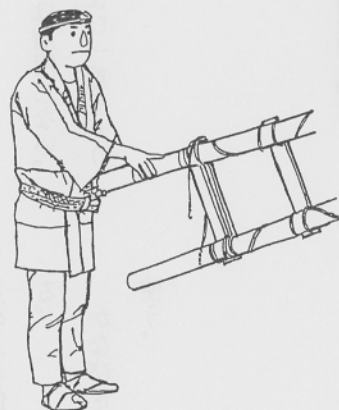
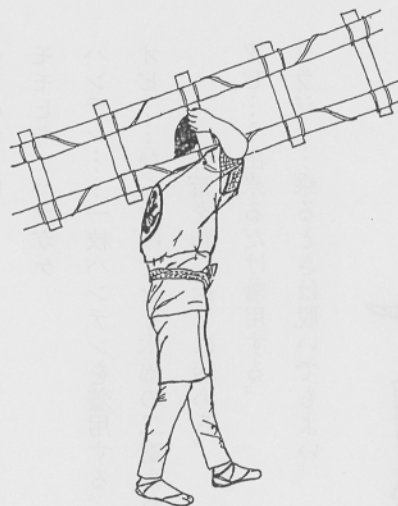
かなびきは、谷のぞき、小猿返し、吹流し、うでだめ、二人乗り等に使う。



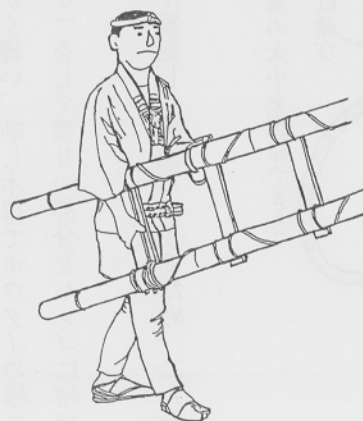
カギの担ぎ方



梯子の持ち方・担ぎ方

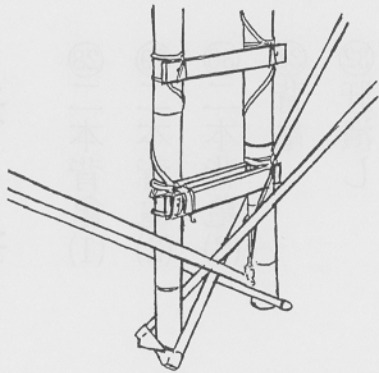
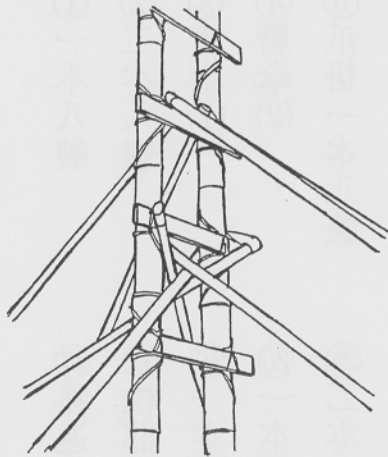


根持 その一

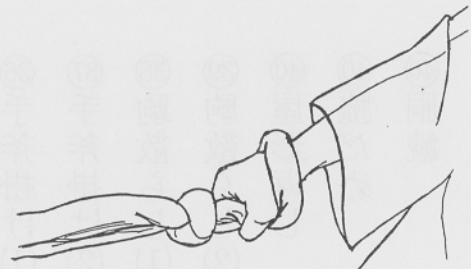
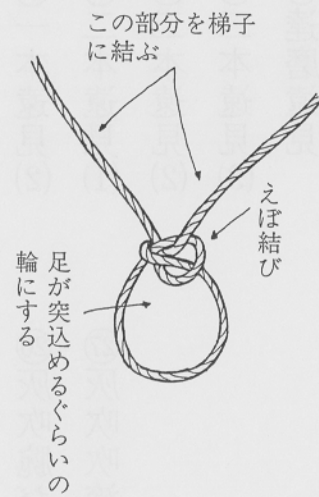


根持 その二

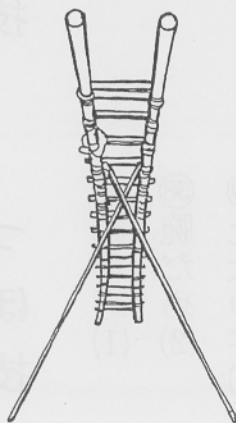
鳶口の掛け方



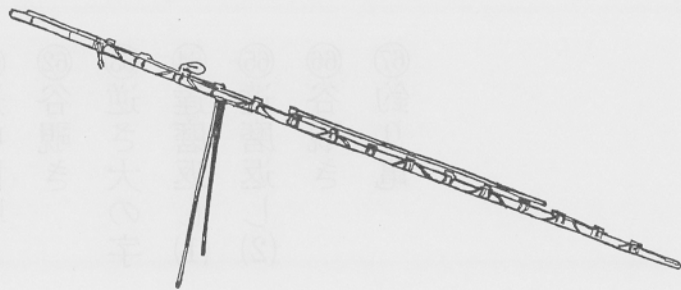
かなびき



握りこぶしとえぼ結びとの間隔が1寸5分位が適當。



待機中のはしご。カギは駒に整頓して置く



演技の種類

頂上技（上芸）

- ① 一本八艘
- ② 二本八艘
- ③ 唐傘(1)
- ④ 唐傘(2)
- ⑤ 爪掛一本八艘
- ⑥ 爪掛二本八艘
- ⑦ 爪機唐傘
- ⑧ 両膝八艘
- ⑨ 一本遠見(1)
- ⑩ 一本遠見(2)
- ⑪ 二本遠見(1)
- ⑫ 二本遠見(2)
- ⑬ 二本遠見(3)
- ⑭ 達磨遠見
- ⑮ 肝潰し(裏)
- ⑯ 外肝潰し
- ⑰ 狐遠見
- ⑱ 枕邯鄲
- ⑲ 一本邯鄲(1)
- ⑳ 一本邯鄲(2)
- ㉑ 二本邯鄲(1)
- ㉒ 二本邯鄲(2)
- ㉓ 二本邯鄲(3)
- ㉔ 鯨(1)
- ㉕ 鯨(2)
- ㉖ 灰吹腕だめ
- ㉗ 灰吹吹流し

返し技

- ㉘ 二本背亀(1)
- ㉙ 二本背亀(2)
- ㉚ 二本背亀(3)
- ㉛ 背亀
- ㉜ 肝潰し
- ㉝ 屋形返し
- ㉞ 二本腹亀(1)
- ㉟ 二本腹亀(2)
- ㊱ 手斧掛け(1)
- ㊲ 手斧掛け(2)
- ㊳ 駒散らし(1)
- ㊴ 駒散らし(2)
- ㊵ 屋形返し
- ㊶ 腕だめ
- ㊷ 胴鯨

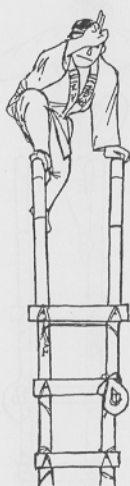
途中技

- ㊸ 膝留め
- ㊹ 唐草(1)
- ㊺ 唐草(2)
- ㊻ 唐草(3)
- ㊼ 腕だめ(1)
- ㊽ 腕だめ(2)
- ㊾ 腕だめ(3)
- ㊿ 腕だめ(4)
- ㋀ 谷覗き(1)
- ㋁ 谷覗き(2)
- ㋂ 谷覗き(3)
- ㋃ 駒ぜり
- ㋄ 胴鯨(1)
- ㋅ 胴鯨(2)
- ㋆ 足絡め(1)
- ㋇ 足絡め(2)

つぼ技

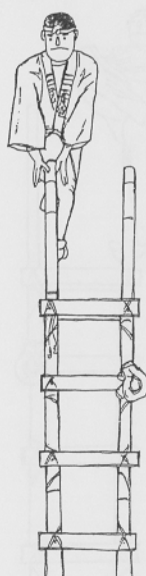
- ㋈ 腕だめ(1)
- ㋉ 腕だめ(2)
- ㋊ 上大の字(1)
- ㋋ 上大の字(2)
- ㋌ 途中邯鄲
- ㋍ 谷覗き
- ㋎ 逆さ大の字
- ㋏ 達磨返し(1)
- ㋐ 達磨返し(2)
- ㋑ 谷覗き
- ㋒ 釣り亀

⑤ 爪掛一本八艘



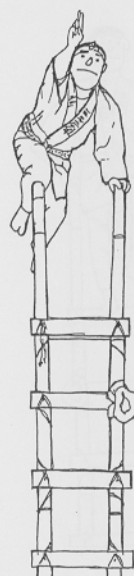
右爪先きを左灰吹にのせ、左手は右灰吹を持つ。
後は②と同じ動作で進む（膝と爪先きの違い）

③ 唐傘(1)



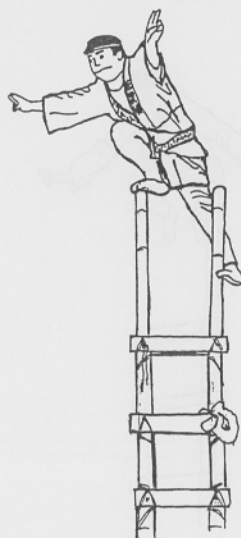
右膝を左灰吹の上にのせ左足は中程に当て、安定したら灰吹を叩く。

① 一本八艘



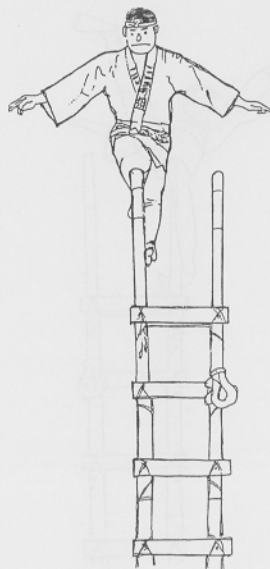
右膝を灰吹の上にのせ左手は右灰吹を持ち左足は右膝の後ろに廻し安定したら右膝前の手で灰吹を叩いて、その手を延ばし同時に左足も延ばす。

⑥ 爪掛二本八艘



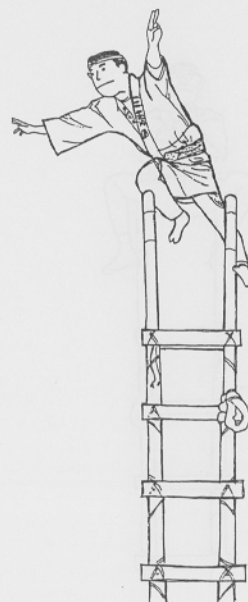
左灰吹きに右爪先きをのせ、左足の甲は右灰吹中程に絡ませ安定したら両手を開く。（左足の絡みで中心をとる）

④ 唐傘(2)



叩いた手を下から画の位置位まで上げて傘を開いた様な状態にする。

② 二本八艘



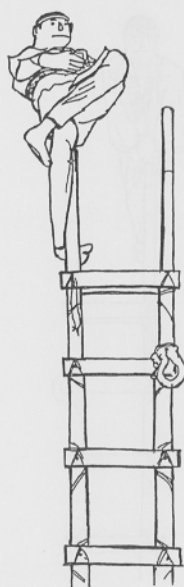
右膝を左灰吹きにのせ、左足首を右灰吹の中程に掛け、両手を揃え、灰吹を叩いて腕を広げる。

⑪二本遠見(1)



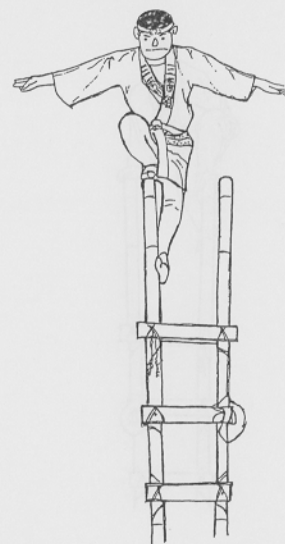
抱き甲に立ち右足を灰吹に絡ませ、大腿部のウラ側にのせる。

⑨一本遠見(1)



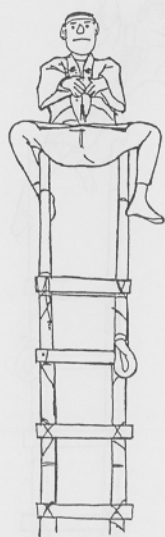
灰吹の上に尻をのせ、右足を灰吹にからませ、左足を膝の上にのせる。

⑦爪掛唐傘



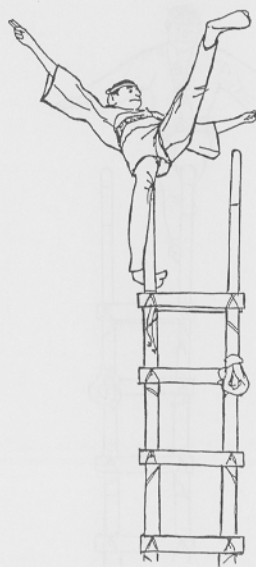
左灰吹に右爪先きをのせ、左足の土踏まずを中程に当て④の要領でやる。

⑫二本遠見(2)



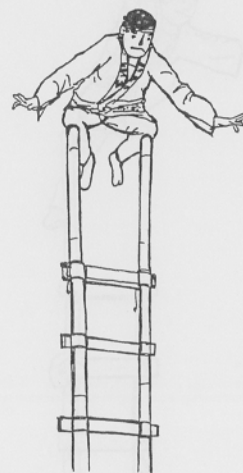
更に左膝ウラを右灰吹に曲げて乗せる。

⑩一本遠見(2)



のせたら手を叩いて両手を斜め上方に向けて開き、膝にのせた、足を、「つま先きがアゴの高さ位になるまで上げる。」

⑧両膝八艘



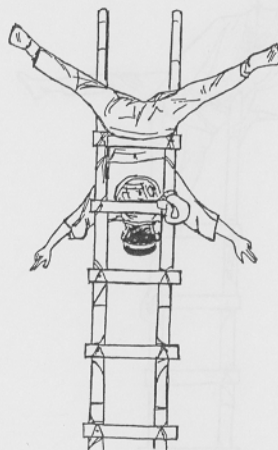
両方の灰吹に手を掛け爪先登りに片方づつの灰吹きに膝をのせ両膝揃って安定してから両手で灰吹を叩き、唐傘の要領で手を広げる。
(そのまま腰をのばし両手を上に上げると「膝立鯨」)

⑪ 狐遠見



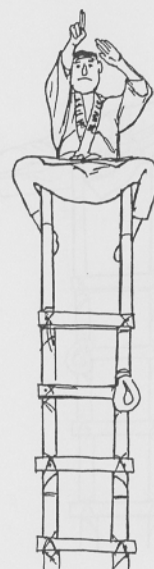
抱き甲に立ち、左灰吹に尻をのせ
右足を内側からからませ、左爪先
きを右灰吹の上へのせ、安定した
ら両腕を左右にやや上向けに開
く。

⑫ ウラ肝潰し



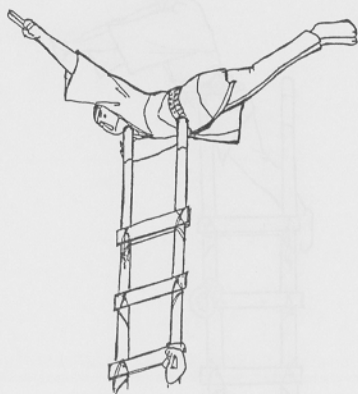
両手を足の下に廻し、体を浮かせ、
抱き甲に落ちると同時に上体を下
げつつ両手、両足を開く。

⑬ 二本遠見(3)



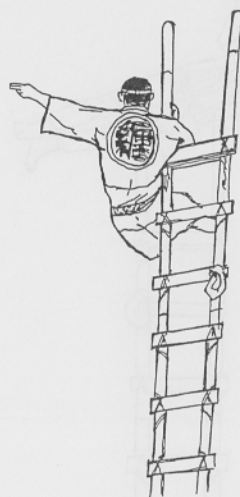
手を叩き左右に開き、同時に左足
を伸ばす。

⑭ 枕邯鄲

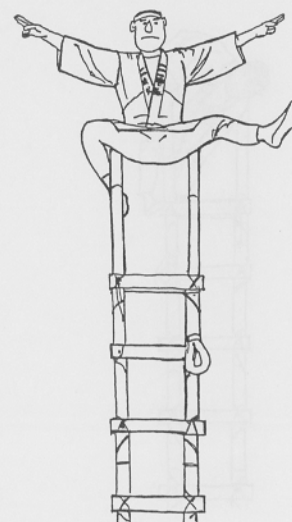


右の灰吹に腹の中心をのせ左右の
灰吹の外側から右手首と二の腕で
からみ、頭を横正面に向けて、左
手と両足を同時にのばす。

⑮ 外肝潰し

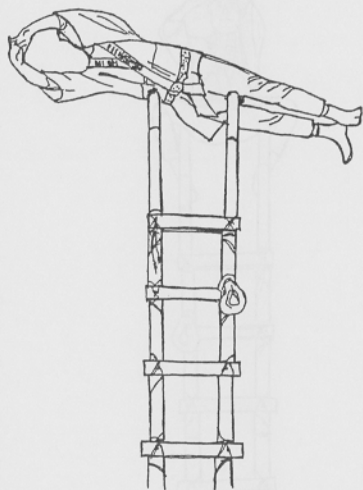


⑯ 達磨遠見



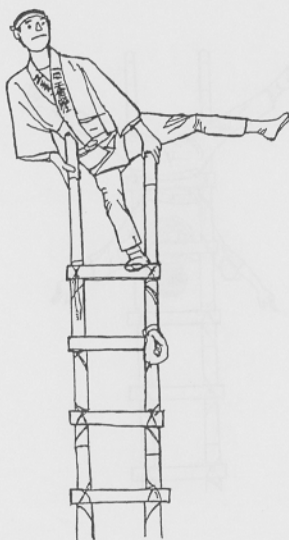
左足を親ごに戻し足首を絡め、小
手をかざし遠くを見るようにして
終り⑬で落ちる。

②③二本邯鄲(3)



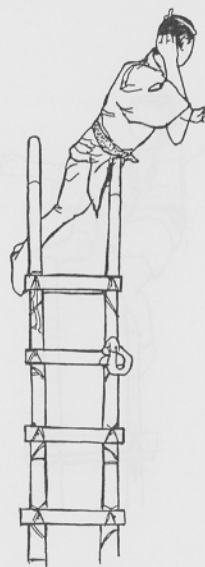
手枕のポーズを解消すると同時に頭部は少し下げ図の様な形、又は下の腕はのばし、上になっている腕を腰に当て三角の空間を作る。

②①二本邯鄲(1)



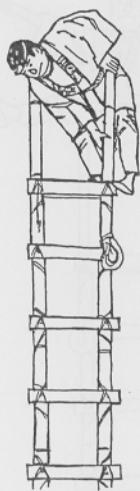
左の灰吹に横腰を当て、右の灰吹にももを乗せる。

①⑨一本邯鄲(1)



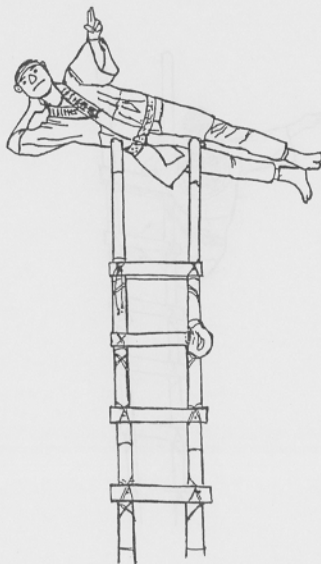
右灰吹に右脇腹の中心を置き、安定したら右手を放し、両足を揃えて延ばす。右手は曲げ枕とし、左手は水平に開く。

②④鯨(1)



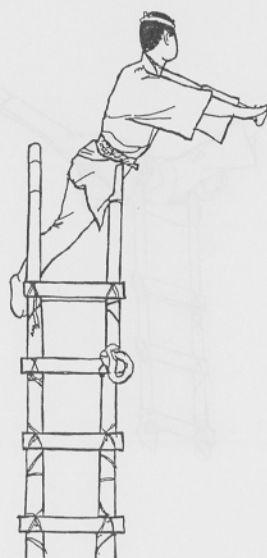
階子の内側に右肩を当て膝を曲げたまま逆立ちに入る。

②②二本邯鄲(2)



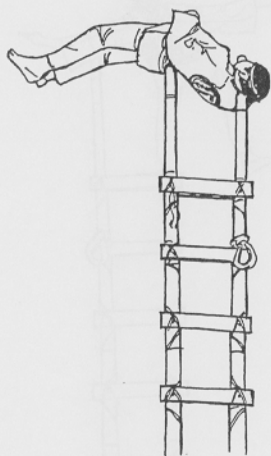
右灰吹の後から右足を左足に水平に添える。灰吹をつかみ安定をはかっていた手を放し手枕の形にした上側の手は斜め上に指す。

②①一本邯鄲(2)



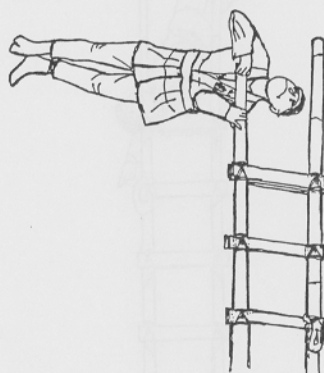
更に両手の指先を絡ませ腕で輪を画き、一呼吸おき手をほどき頭を下向きにし「肝潰し」③②に返る。

②⑨二本背亀(2)



坪にはまったら左手で右灰吹を持ち頭を廻し、右灰吹の上に首をのせる。

②⑦灰吹吹流し



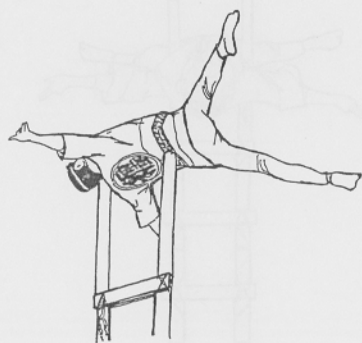
右手の肘の内側を左灰吹の上にのせ、左手は灰吹を押す様にして。左、右の足を揃え側面に押し出す。此の時の姿勢は体が地面と平行になる様に。

②⑤鯨(2)



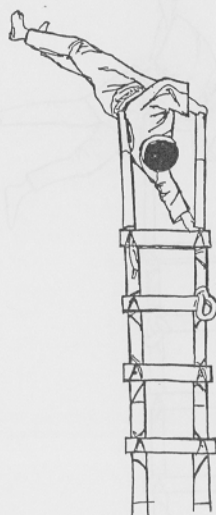
逆立ちがきまったら両足首で叩き、開脚し閉脚する。返り技に、背亀・腹亀、屋形返し・鯨落し・藤下がり等がある。

③①二本背亀(3)



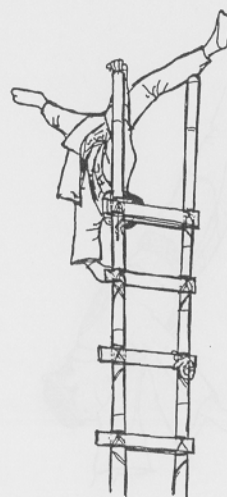
首をのせ、安定したら胸前で手を叩き両手、両足を同時に開く。

②⑧二本背亀(1)



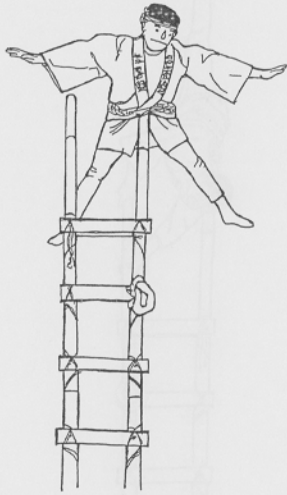
鯨落しをしながら左灰吹に後腰の坪を当てる。

②⑥灰吹腕だめ



抱き甲に立ち、右手で左灰吹の上端を持ち、左手で二段目甲の外側を握り、足を蹴って逆立ちし、安定したら足首を叩いて開脚、閉脚して終る。
※逆立ちした時、体が左回転し易いので注意。

③⑤ 二本腹亀(2)



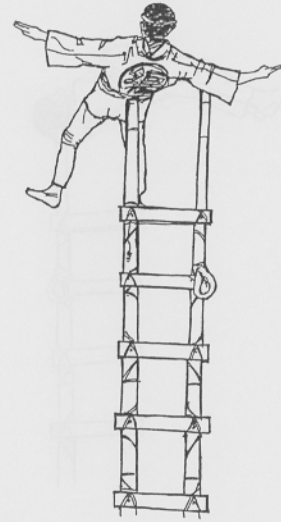
両手で左、右の灰吹をつかみ左回転をし正面を向く、一呼吸のあと手足を亀泳ぎに動かす。

③③ 屋形返し



(二本腹亀より)
腹下の灰吹を右手と左手で掴み灰吹よりアゴを外し、頭を腹下の灰吹の下方に向けて回転させると同時に両足を開き前方の灰吹に尻の割れ目を当てる様に回転する、安定した所で両足を開く。

③① 背亀



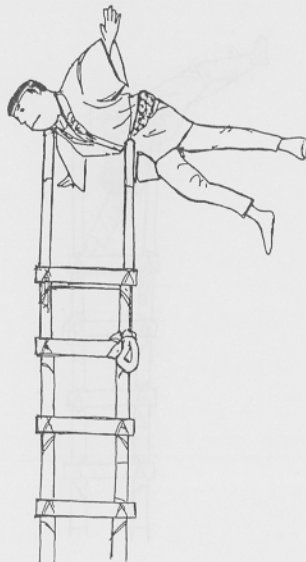
右手で右灰吹を持ち首をはずし表に廻す。完全に静止したら支えていた手を離し手、足を一緒に動かす(亀泳ぎ)一呼吸して肝潰しに落ちる。

③⑥ 手斧掛け(1)



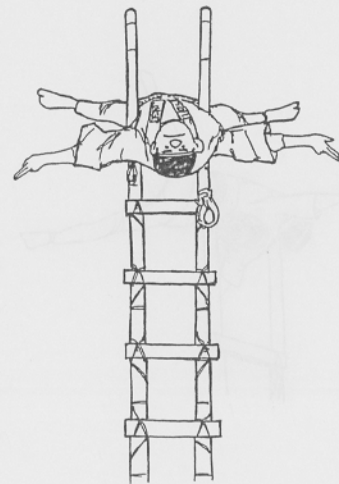
(灰吹の腕だめより)
両足の甲を灰吹の上に掛け左、右手にて三段目の駒をつかみ安定したら左手で駒を叩き、左手を前方に上げる。

③④ 二本腹亀(1)



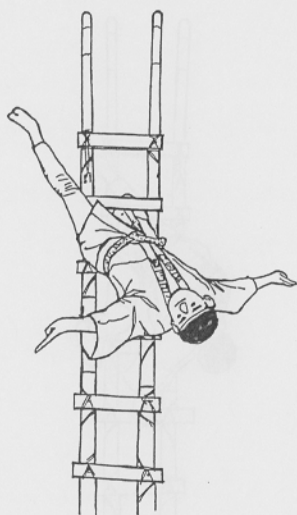
(鯨から)
右の灰吹の上端に腹の中心を乗せ左の灰吹の上にアゴ下を乗せバランスのとれた所で両手で灰吹を叩き手を左、右に開く。

③② 肝潰し



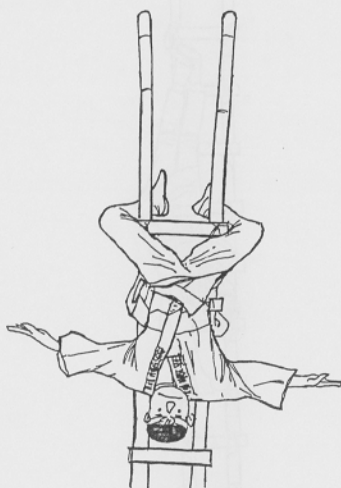
片方の手を灰吹に、片方の手を灰吹の下に廻し体重を支え、灰吹の間に恰も墜落したようにし、抱き甲に腰がつくと同時に開脚し上体を下げ両手を胸にして手を叩き広げる。

④1 膝留め



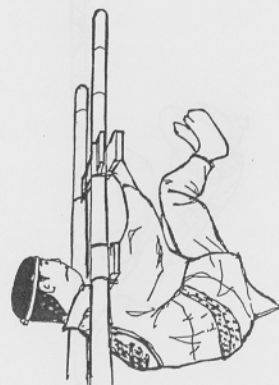
駒の間に右足を入れ膝を曲げ、踵は左隅におき、安定したら手を離す。
両手を胸に上体を序々に倒し、支えていた左足を駒からはずし、手を叩き両手を広げ、左足も上に向け開き。「逆さ大の字」

③9 駒散らし(花散らし)(2)



手を閉じ両手で灰吹を握り、両足を外に抱き甲の外で留め、手を広げる。
この繰返して順次一段づつ降りる。

③7 手斧掛け(2)



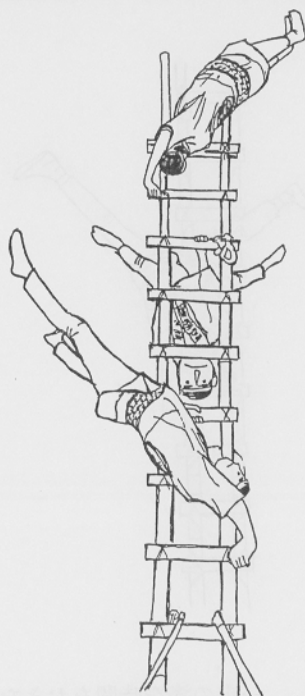
支え手の駒の上に首を入れ両足の甲を灰吹より外して上図の様な姿となり両足を叩いて左、右に広げ前方に回転しておりる。

④2 唐草(1)



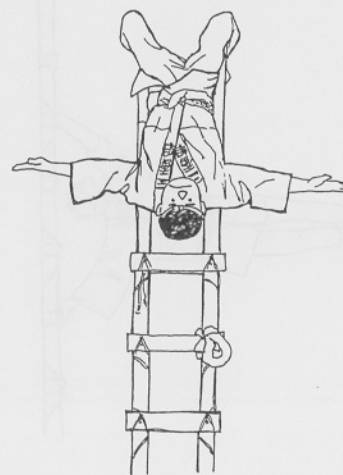
起き上がり、左抱き甲下に爪先きを絡め、左足を添え、上体を下げ両手を叩いて左足を上方に開き両手を水平に広げる。

④0 尾形返し、腕だめ、胴鯨



上 屋形返し
中 腕だめ
下 胴鯨

③8 駒散らし(花散らし)(1)



(肝潰し) より
両手で両灰吹を握り両膝のウラを灰吹の上にのせ、安定したら両手を広げる。

④7腕だめ一芸(3)



口から足を縮めながら体を真横にし、再び足をのばす。

④5腕だめ一芸(1)



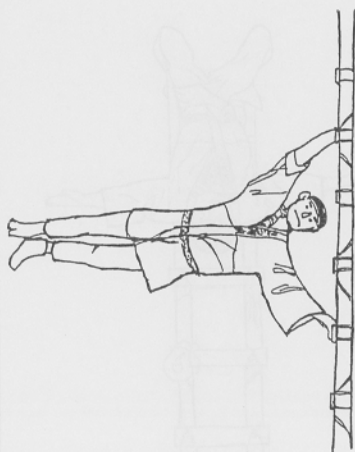
「階子乗り」入門となるとこの技から始めるのが一般的で木遣に於ける手古に匹敵する。ここには「駒」を使って行なう事を画いてあるが、「つば」を使っても、「灰吹」を使っても出来る。ここでは、甲が二ツ入るものを選んだが、技が長ければ、甲一つの間隔でやるのが良い。

④3唐草(2)



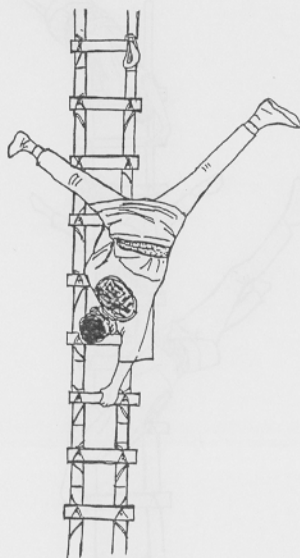
体を下に向け右足は右抱き甲の下端に絡め、左足は四段目の駒におく。

④8腕だめ一芸(4)



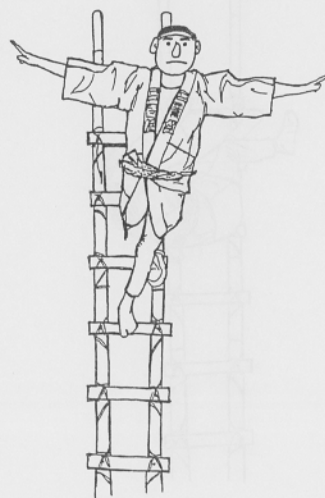
体を地面と水平になるように保ち、足首を叩き足を開き、閉じて、演技始めの状態に戻る。

④6腕だめ一芸(2)



しかし、一定の滞空時間をおきながら、律動的にやるには、相当な腕ッ節が必要である。

④4唐草(3)



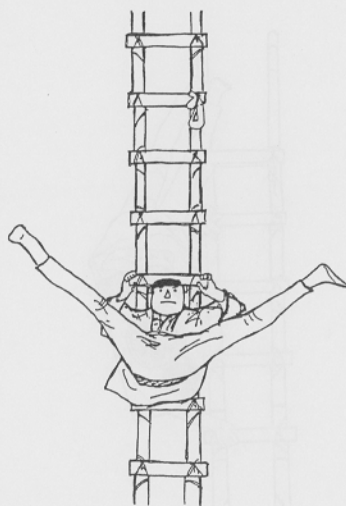
両手も四段目の駒に揃え、その駒を叩いて体を起こし顔を上げ両手を水平に開く。

⑤③ 胴鯨(途中鯨)(1)



右腕を駒の正面から親ごを抱え込むようにして外駒を握り、左腕は一段下の駒を握って跳上げる。

⑤① 谷覗き(3)



④⑨ 谷覗き(1)



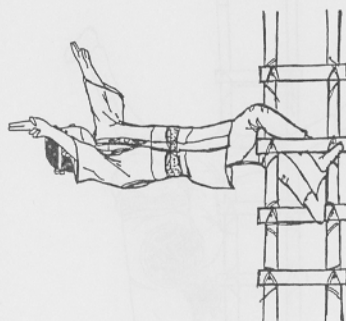
腕だめを極めてから足を戻し、三駒と二駒の間から足を入れ、膝を折って抱き甲の表に足の甲を掛ける。両手は持ち変えて四段目の外駒で支える。

⑤④ 胴鯨(途中鯨)(2)



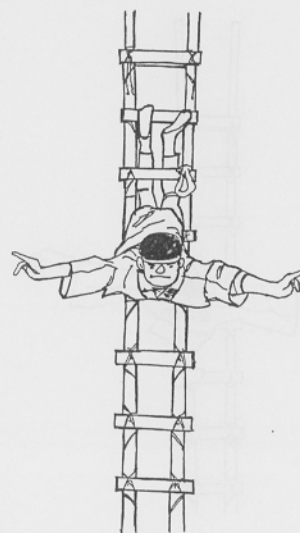
左親ごの外に出るまでそったら両足首で叩き、足を開き、一呼吸して閉じる。

⑤② 駒ぜり(足絡み)



両手で左親ごを掴み、側面から左足を下段右親ごに右足を駒内側から駒下当て突張り安定したら手を放し仰向けに体を倒し、手を叩いて好みの恰好に両手を開く。

⑤⑤ 谷覗き(2)



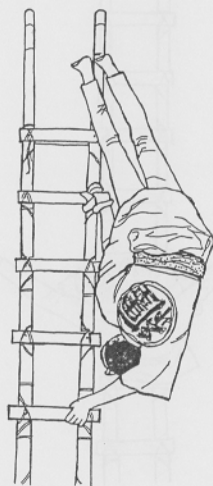
安定したら、両手で駒を叩き胸をそらして両腕をのばす。終ったら元の駒に手を戻し、体の重心を支え足を抜き⑤③に返る。

⑤⑨ かなびき一芸(1)



「かなびき」に右足を入れる。

⑤⑦ つぼ、腕だめ(1)



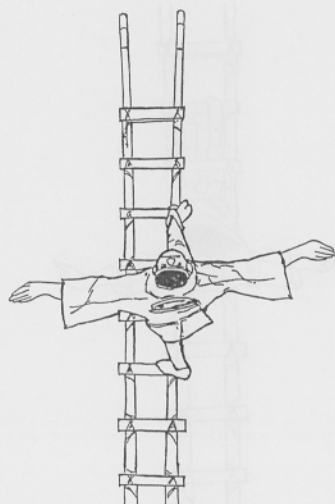
右親ごに取付けたかなびき(つぼ)に右手を差入れ、三段下の駒を握り、逆立ちに入る。
※つぼに差込んだ手は多少不安定になり、体が振られることがあるので注意。

⑤⑤ 足絡め(1)



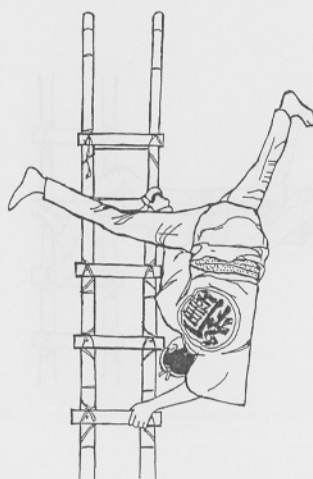
胴鯨から元に戻りながら両足首を左親ごに交叉して絡める。

⑥① かなびき一芸(2)



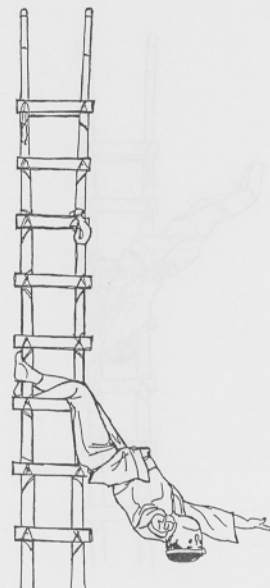
「上大の字」
かなびきに片足が入ったらもう一方の足は甲を押すようにし、両手を広げる。

⑤⑧ つぼ、腕だめ(2)



安定してから両足首で叩き、両足を開き一呼吸置きとじる。

⑤⑥ 足絡め(2)



足が安定したら手を放し体を仰向けに倒す。倒し終わったら手を叩いて広げる。
※最上段で、この形になれば「藤さがり」の別称もある。

⑥5 達磨返し(野猿返し)(2)



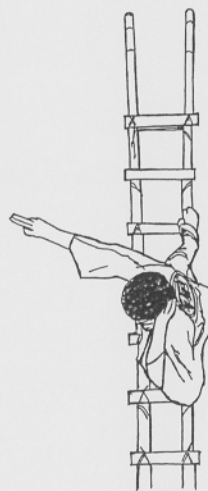
両脚を腰と直角にしておき、返ったときは腰が当たるようにする。

⑥3 逆さ大の字



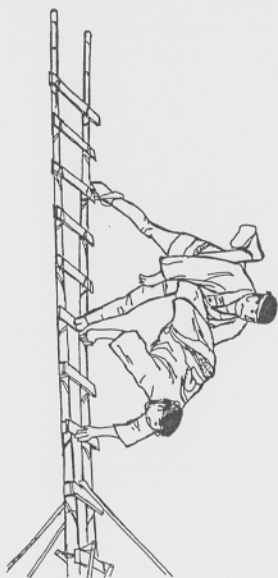
かなびきに差した足を、反対側の足と同じ角度にし、竹からなるべく遠く離れるようにする。

⑥1 途中邯鄲



身体を横向きにかえ、下側の腕は手枕に、上側の腕を斜め上にのばす。

⑥6 谷覗き



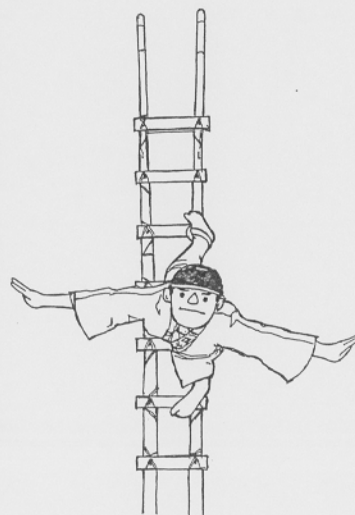
下りのりは、足釣りの「逆さ大の字」から上りのりの胸に足を絡める。上りのりは下りのりの足をたぐって胸に絡めやすくする。下りのりの階子をたたくの合図に上下共に胸をそらせる。

⑥4 達磨返し(野猿返し)(1)



(つば腕だめ、から)
つばに差入れた手を中に二駒以下に(四段目)両足を揃えてのせ、頭を巻き込むようにでんぐり返る。

⑥2 谷覗き



足更に身体の向きを下にする。

準備中級⑩

窄の大ちんね⑩

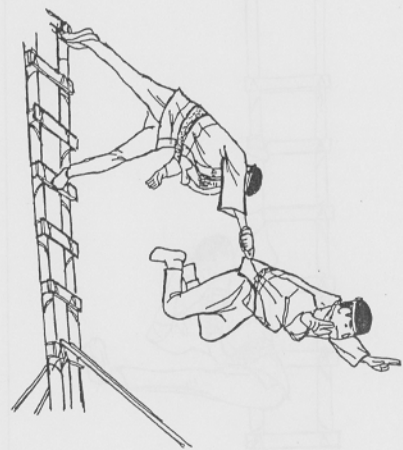
⑥7 釣り亀



お調子で下り、上へ出る向きを調整
お調子で下り、上へ出る向きを調整
お調子で下り、上へ出る向きを調整



お調子で下り、上へ出る向きを調整
お調子で下り、上へ出る向きを調整
お調子で下り、上へ出る向きを調整



上りの役は、下りの役の帯を掴んで釣下げ、下りの役は手足を動かし亀泳ぎをする。

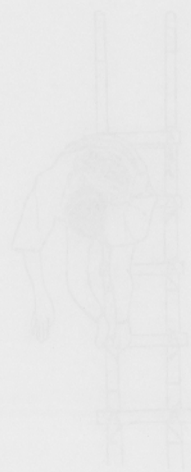
考察⑩

①(下り役)上り役⑩

考察⑩



お調子で下り、上へ出る向きを調整



お調子で下り、上へ出る向きを調整
お調子で下り、上へ出る向きを調整
お調子で下り、上へ出る向きを調整



お調子で下り、上へ出る向きを調整
お調子で下り、上へ出る向きを調整
お調子で下り、上へ出る向きを調整